青森市埋蔵文化財発掘調査報告書　第38集

# 野　木　遺　跡

## 発掘調査報告書

平成9年度

青　森　市　教　育　委　員　会

第１号竪穴遺構遺物出土状況

第１号竪穴遺構出土遺物

生焼けと焼成良好品の接合例

# 序

四季折々に、美しい彩りを見せる八甲田山を南に仰ぎ、豊かな海の恵みをもたらす陸奥湾を北に望む青森市には、国史跡となった小牧野遺跡や、三内丸山遺跡をはじめとする遥かいにしえ人の足跡を残す遺跡が数多く所在しております。

その一方、現代に生きる私達の生活の利便性を考えるうえで、各種開発事業は欠くことのできないものとなっております。

開発事業の際には、予定地内に遺跡が所在している場合、開発事業との円滑な調整を図るため、事前の発掘調査を実施し、多くの遺跡が記録として残されているのも事実です。

本報告書は、平成9年度市道野木酸ケ湯線特殊改良一種事業の実施に先立ち、当該路線内に所在する野木遺跡の発掘調査を実施し、その成果をまとめたものです。

今回の調査によって、野木遺跡は、平安時代の集落跡の一部であることが確認され、当時の生活を知る上で貴重な資料を得ることができました。

これらの調査成果が、今後、埋蔵文化財の保護・活用、さらには本市の歴史解明の一助となれば幸いと存じます。

最後となりましたが、ここに本書を刊行できましたことは、ひとえに各関係機関・諸氏のご指導、町会並びに地権者の皆様のご協力の賜ものによるものと、深く感謝の意を表する次第であります。

平成10年3月

青森市教育委員会

教育長　池　田　　敬

# 例　　言

1. 本書は、平成９年度に実施した市道野木酸ケ湯線特殊改良一種事業に係る野木遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査を実施した野木遺跡は、青森県遺跡台帳に遺跡番号01210番として登録されている周知の遺跡である。
3. 本書の執筆・編集は青森市教育委員会が行い、執筆者名は文末に記している。
4. 図版及び表番号は原則的に「第〇図」「第〇表」とした。
5. 本報告書の土層の注記については、「新版標準土色帖」（小川正忠・竹原秀雄1993）に準拠した。
6. 挿図の縮尺は各図ごとに示し、各種遺構平面図の方位は磁北を示した。なお、写真図版の縮尺については、統一を図っていない。
7. 住居跡のカマドの主軸方位は、袖部の中央線を基準線とした。
8. 住居跡の壁長は、壁の上端部と下端部をそれぞれ計測した。
9. 石器の石質鑑定は、青森県教育センター指導主事　工藤一彌氏にご教示をいただいた。
10. 引用・参考文献は巻末に収めた。
11. 出土遺物及び記録図面・写真関係資料は、現在、青森市教育委員会で保管している。
12. 発掘調査の実施にあたっては、調査地区地権者及び地元町会の多くの方々にご協力をいただき、また、発掘調査並びに本報告書作成にあたっては、次の機関・諸氏にご指導・ご教示・ご協力を賜った。ここに深く感謝の意を表する次第である。（順不同・敬称略）

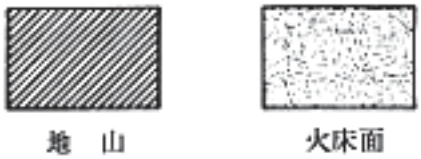
　青森県教育庁文化課、青森県埋蔵文化財調査センター、赤沼英男、工藤清泰、榊原滋高、神康夫、中嶋友文、中田書矢、奈良岡淳、誉田実

# 凡　例

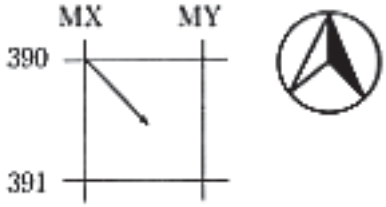
本報告書内で使用する表現方法、スクリーントーン等は以下のとおりである。

1. 図中に使用したアルファベット・スクリーントーン等

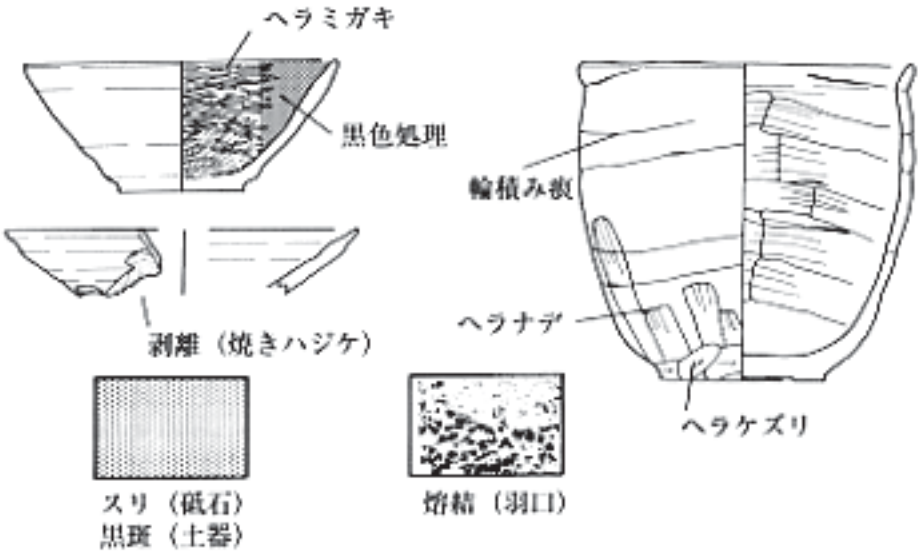
Ｐ－土器、Ｓ－石器、ＬＢ－ロームブロック




2. グリッドの呼称




3. 土器実測の表現方法・スクリーントーン等




4. 遺物観察表における項目欄について

・「法量」欄については、①、②、③の項目を設けている。土器については、①（口径）、②（器高）、③（底径）を表す。また、石器、土製品・鉄製品については、①（最大長）、②（最大幅）、③（最大厚）を表し、石器の重量・石質については、備考欄に記した。

・「胎土」欄については、土器・土製品について用いた。胎土中の混入物の種類と量について抽出した。観察表で表記されている項目は、礫（粒径5.0㎜以上の小礫）、砂（長石や輝石などの砂粒）、骨（海綿骨針）である。その他、酸化鉄などによる赤色粒については、備考欄に記した。

　このうち、海綿骨針については、土器胎土の原材料（粘土）が海成起源であることを示すものであり、火山性起源の粘土と判別する際に有効である（井上　1995）。本遺跡のように火山性台地上の遺跡においては、他地域からの粘土の流入、あるいは、製品の流入の可能性について想定できる。ちなみに五所川原産須恵器には、一定量の海綿骨針が見られ、粘土として、海成起源である前田野目層（工藤一彌氏の教示による）の利用が背景にあるものと想定される。

・「遺存率」については、口縁部のみの残存率を12分割で測定し、百分率で表記した。

・「整理番号」については、遺物整理時の実測図番号と一致する。

# 目　　次

（巻頭図版）

序

例言

凡例

目次

第Ⅰ章　調査の概要
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査要項 …… 1
　第３節　調査方法 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の環境
　第１節　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 3
　第２節　遺跡の層序 …… 5

第Ⅲ章　検出遺構と出土遺物
　1. 竪穴住居跡 …… 7
　2. 竪穴遺構 …… 17
　3. 土坑 …… 23
　4. 小ピット …… 24
　5. 溝跡 …… 27
　6. 遺構外出土遺物 …… 29

第Ⅳ章　考察
　第１号竪穴遺構について …… 31
遺物観察表 …… 36

まとめ …… 38

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

# 第Ⅰ章　調査の概要

## 第1節　調査に至る経過

青森市建設部（以下、建設部）は、市道野木酸ケ湯線特殊改良一種事業を計画し、青森市教育委員会（以下、当委員会）に対し、道路建設予定地内について、埋蔵文化財包蔵地所在の有無の確認がなされた。

これを受けて当委員会で確認をしたところ、当該予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地である野木遺跡が所在していることが判明した。当委員会では、埋蔵文化財保護の立場から、埋蔵文化財包蔵地の現状保存のため、事業計画予定地の変更並びに見直しの要望と、もしそれが困難な場合は、事前に記録保存のための発掘調査が必要である旨の回答をした。

その後、建設部と当委員会で、その取り扱いについて協議を行ったが、事業計画の変更は困難であるとの結論に至り、事前の発掘調査による記録保存が図られることとなった。

建設部より、平成9年9月11日付青市道第149号で、当委員会に発掘調査の依頼があり、これを受けて当委員会で協議を重ねた結果、文化財保護と開発事業の円滑な調整を図るため、受諾することに至り、平成9年9月19日付青市教委社第453号において、建設部に受諾の旨を回答した。

建設部と協議の結果、現地での調査期間を平成9年9月24日から同年10月31日までとし、調査を実施するに至った。予算措置は、建設部において計上することとした。

今年度の発掘調査区域は、遺跡範囲の一部を縦断する道路建設予定地である。

なお、野木遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡台帳に登録されたのは、平成5年度のことであり、台帳には210番目に登録されている。

## 第2節　調査要項

**1．調査目的**

市道路課が計画している野木酸ヶ湯線特殊改良一種事業に先立ち、工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存をおこない、地域社会の文化財の活用に資する。

**2．遺跡名及び所在地**

野木遺跡（のぎいせき）

青森市大字野木字山口ほか

**3．発掘調査期間**

平成9年9月24日～同年10月31日

**4．調査対象面積**　363㎡

**5．調査委託者**　青森市建設部

**6．調査受託者**　青森市教育委員会

**7．調査担当機関**　青森市教育委員会生涯学習部社会教育課埋蔵文化財対策室

**8．調査指導機関**　青森県教育庁文化課

**9．調査協力機関**　青森県埋蔵文化財調査センター

**10．調査体制**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 調査指導員 | 村越　　潔 | 青森大学考古学研究所所長兼教授 | （考古学） |
| 調査員 | 高島　成侑 | 八戸工業大学教授 | （建築史学） |
| 〃 | 三浦　孝仁 | 青森市立長島小学校数諭 | （考古学） |

調査事務局　青森市教育委員会

| | |
|---|---|
| 教育長 | 池田　敬 |
| 生涯学習部長 | 永井勇司 |
| 社会教育課長 | 山田　章 |
| 埋蔵文化財対策室長 | 遠藤正夫 |
| 室長補佐 | 福士　敦 |
| 埋蔵文化財係長 | 石岡義文 |
| 主事 | 田澤淳逸（調査担当） |
| 〃 | 小野貴之 |
| 〃 | 木村淳一 |
| 〃 | 児玉大成 |
| 〃 | 沼宮内陽一郎 |
| 〃 | 設楽政健 |

## 第3節　調査方法

工事路線内における調査対象範囲は、全面調査を原則として実施した。

調査区の設定にあたっては､隣接して調査を行っている青森県埋蔵文化財調査センターで設定したグリッドから延長したラインを使用し、調査区全体に4m×4mのグリッドを設定した。グリッド杭の表示は、MW－484を基準として、南へ485、486、487の順に算用数字を付し、東にMX、MY、MZ、の順にアルファベットを付した。各グリッドの呼称はアルファベットと算用数字を組み合わせて示した（凡例参照）。具体的にはそのグリッドの北西隅グリッド杭の表示によるものとした。なお南北方向の基準線は磁北0°である。

測量原点（B.M.）は、県が調査用に設置したB.M.（88.000m）を基準とし、ここから原点移動を行い、標高89.300mの原点（B.M.1）を設置した。これをもとに、高低差およそ2m、総延長40mの調査区に対処するため、さらに1ヵ所設置した。

粗掘りは、調査区が細長く狭小な範囲であるため、セクションベルトは設けず、グリッド単位で掘り進めた。調査区が、かつて道路として利用された際、路面に敷設した砂利が多量に残存しており、粗掘りに関して困難を極めることが予想されたため、遺構面までの深度及び遺物の包含層を確認したうえで、大型重機による表土処理を行った。

遺物の取り上げは、遺構内、遺構外出土遺物とも各層ごと一括し、必要に応じて番号を付して実施した。遺構の精査は、原則として竪穴住居跡は四分法で、土坑は二分法で実施した。実測は、簡易遣り方測量と、平板測量を併用して行い、縮尺は20分の1を原則とした。写真撮影は、35mmのモノクローム、カラーリバーサルの各フィルムを併用し、作業の進展に伴い、必要に応じて行った。

（田澤　淳逸）

# 第Ⅱ章　遺跡の環境

## 第１節　遺跡の位置と周辺の遺跡

青森市は、北側に陸奥湾に面した青森平野、南側は八甲田山から延びる火山性の台地、東側は、東岳を中心とした比較的急峻な山地、西側は、標高50～150㎜の開析が進んだ比較的緩傾斜な丘陵地によって構成されている。野木遺跡は、八甲田山から延びる火山性の台地上、東西を合子沢川と牛館川に挟まれた丘陵上に立地し、市街地から南に約9㎞、標高50～90㎜に位置する。

本遺跡は平成５年度に青森県教育委員会によって実施された分布調査により、青森市内で210番目に登録された遺跡であり、縄文時代と平安時代の複合遺跡であることが報告されている。

本遺跡北側部分については、平成７年度から青森県埋蔵文化財調査センターによって、青森中核工業団地整備事業に先立つ試掘調査が実施され遺構の確認と遺跡範囲の把握がなされた。平成8、9年度には同センターが、また、平成９年度からは青森市教育委員会が加わり、合同で発掘調査が実施され、縄文時代と、平安時代の集落跡の一部が確認されている。

また、本遺跡の約1㎞北側に所在する新町野遺跡は、牛館川防災調整池に係わる掘削工事に先立ち当委員会によって試掘調査が実施され、対象面積25,000㎡のうち1,500㎡の実施面積から縄文時代の竪穴住居跡６軒、平安時代の竪穴住居跡８軒、土坑32基、埋設土器遺構４基、竪穴状遺構１基、溝状遺構２条、ピット32基を確認している。

本遺跡から半径2㎞以内に所在し、本遺跡と時代を同じくする周辺の遺跡は、本遺跡を含め８箇所確認されている。本遺跡と同じく合子沢川と牛館川に挟まれた丘陵上に所在する遺跡として、北に新町野遺跡、東側に合子沢松森(2)遺跡、西側に野木沢田遺跡がある。さらに合子沢川を挟んで東側には、横内(2)遺跡、横内猿沢(1)遺跡、桜峯(1)遺跡が所在し、牛館川を挟んだ西側には、葛野(2)遺跡が所在する。各遺跡の概要は第１表のとおりである。

（沼宮内　陽一郎）

| 番号 | 遺跡番号 | 遺　跡　名 | 所　在　地 | 種　　別 | 主　な　時　代 | 文　　献 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 210 | 野木 | 野木字山口<br>合子沢字松森 | 散布地<br>集落跡 | 縄文、平安 | |
| 2 | 161 | 新町野 | 新町野字菅谷 | 集落跡 | 縄文(前)、平安 | 青森市教育委員会　1997 |
| 3 | 262 | 合子沢松森(2) | 合子沢字松森 | 散布地 | 平安 | |
| 4 | 216 | 野木沢田 | 野木字沢田 | 散布地 | 平安 | |
| 5 | 206 | 横内(2) | 合子沢字山崎 | 集落跡 | 縄文(前・中)、平安 | 青森市教育委員会　1995 |
| 6 | 284 | 横内猿沢(1) | 横内字猿沢 | 散布地 | 平安 | |
| 7 | 207 | 桜峯(1) | 横内字桜峯 | 集落跡 | 縄文(前・中・後)、平安 | 青森市教育委員会　1997 |
| 8 | 218 | 葛野(2) | 大別内字葛野 | 集落跡 | 縄文(前)、平安 | 青森市教育委員会　1997 |

**第１表　本遺跡と周辺の遺跡の概要**

**第１図　本遺跡及び周辺の遺跡位置図（S ＝ 1/50,000）**

## 第２節　遺跡の層序

本調査区一帯は、以前から畑地や林地、さらには道路として利用されてきていたことから、撹乱等が随所に認められ、土層堆積に関してみると、プライマリーな堆積状況は、ほとんど確認・把握することができなかった。

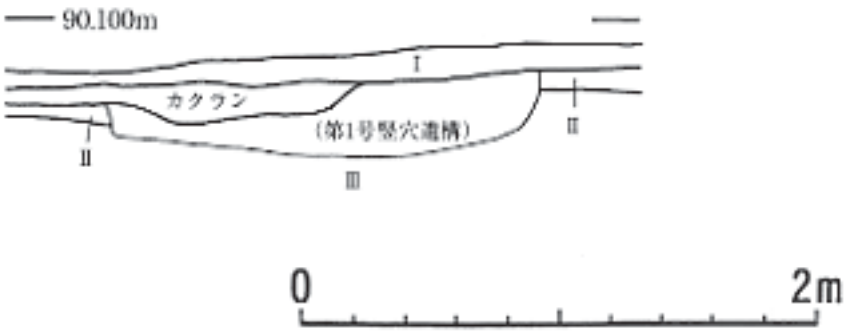
従って、当地区における標準土層は以下に記すとおり元来は平安時代等の文化層も存在したはずであるが、表土と地山並びにその中間の漸移層の３層に分層することにとどまった。

なお、十和田ａ火山層、白頭山火山灰の古代に位置される２種の火山灰に関しては、隣接する他の調査区（中核工業団地整備事業に係る野木遺跡発掘調査）では部分的に検出されているものの、本調査区では、以上のことなどの要因から確認されていない。

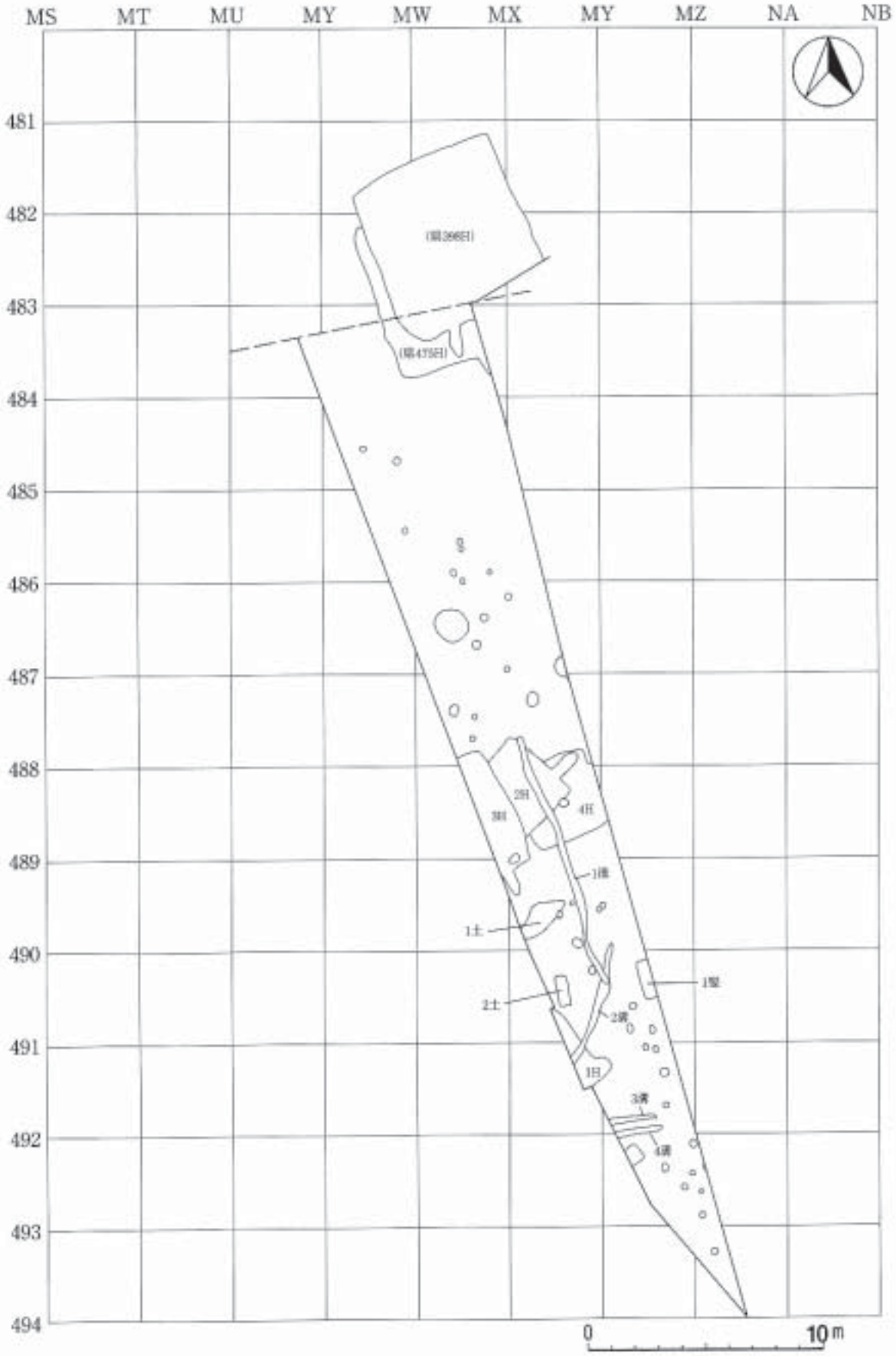
本調査区域の基本層序は、次のとおりである。

第Ⅰ層　10YR3/1　黒褐色土　　表土。主に耕作土。
第Ⅱ層　10YR3/3　晴褐色土　　ところどころにロームが含まれており、漸移層と捉えられる。
第Ⅲ層　10YR4/4　褐色土　　地山ローム層。

（田澤　淳逸）




**第２図　基本層序**




**第３図　グリッド配置図及び遺構配置図（S ＝ 1/250）**

# 第III章　検出遺構と出土遺物

本調査では、平安時代の竪穴住居跡４軒、竪穴遺構１基、土坑２基、柱穴状ピット 41 基、溝跡４条を検出した。また、段ボール３箱分の土器・鉄製品等の遺物が出土した。なお、遺物の主体を占める土師器の帰属時期に関しては、ごく少量であったことや調査面積が狭小なことから比較検討が困難であり、明確な特定には至らなかったが、現時点で概ね 9C 末～ 10C 前半と想定している。

## 1．竪穴住居跡

### 第１号竪穴住居跡（第４図）

［位　　置］MX － 490・491 グリッドで検出した。基本層序第III層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］第２号溝跡と重複しており、第２号溝跡が新しい。

［平面形・規模］調査区外に続くため、全体形は確認できないが、ほぼ方形を呈するものと思われる。計測可能な範囲内での規模は上端部で、北東壁辺367㎝、南東壁辺100㎝を確認し、下端部で北東壁辺350㎝、南東壁辺 80㎝を確認した。確認面から床面までの深さは最深部で 63㎝を計る。

［　壁　］ほぼ垂直に立ち上がり、やや脆弱である。

［　床　］地山を床としており、やや凹凸があるが堅緻である。

［壁　　溝］北東壁南隅で部分的に確認した。

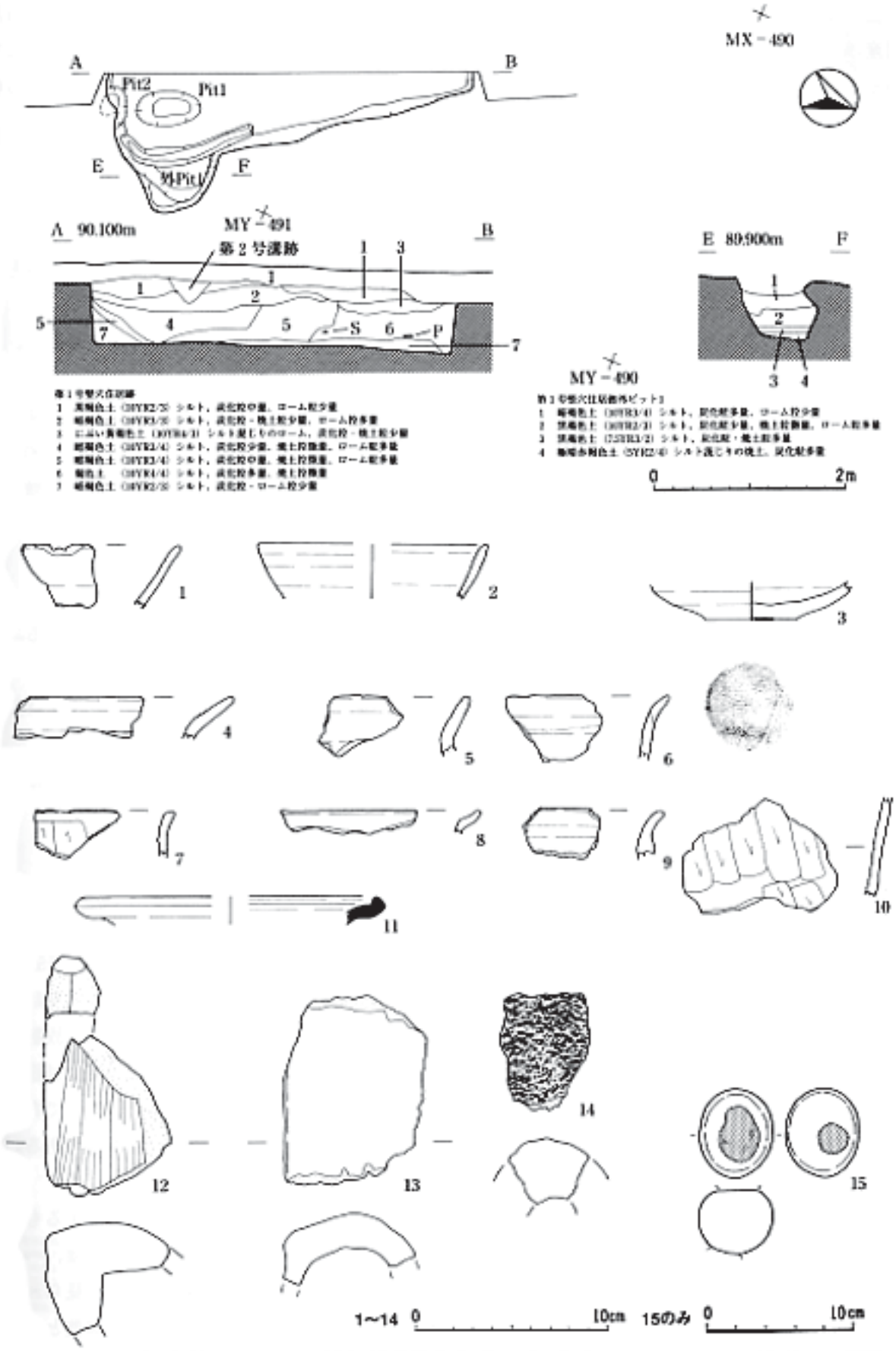
［ピ　ッ　ト］南東壁側部分にピット２基を検出している。ピット１は開口部で 68 × 38㎝、深さは 8㎝、ピット２は開口部で 48 × 35㎝、深さは 14㎝である。

［カ　マ　ド］確認されなかった。

［堆　積　土］７層に分層した。自然堆積と思われる。

［その他の付属施設］北東壁南隅に、ピットが１基確認された。堆積土は４層に分層した。ピットの覆土全体に焼土が混入している。

［出土遺物］出土遺物のうち、図示したものについては、第４図１～15 までである。床面からの出土は 15 の砥石よりなく、他は、いずれも覆土、ピットからの出土である。１～３は、土師器坏である。１は、口縁部から胴部にかけての破片で、砂粒を多く含む。色調は外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈する。調整は、内外面ともロクロナデによるものである。２は、口縁部から胴部にかけての破片で、復元径 12.2㎝を計る。砂粒を多く含み、やや丸みを帯びた立ち上がりを持つ。色調は、内面が浅黄橙色、内面がにぶい橙色を呈する。焼成は並である。調整は内外面ともロクロナデによる成形である。２は、胴部下半から底部にかけての破片で、底径は 4.8㎝を計る。砂粒を多く含み、やや浅く丸みを帯びた立ち上がりを持つ。色調は、内外面とも浅黄橙色を呈する。焼成は並である。調整は、内外面とも摩滅が激しいがロクロナデであることが想定され、底部切り離しは、右回転の糸切によるものである。４～ 10 は、土師器甕である。かなり小破片化したものが多いが、４～９が口縁部、ならびに口縁部から胴部にかけての破片で、11 は、胴部片である。ロクロ使用のものと非ロクロ系のものが見られ、外面調整にヘラケズリが見られるもの（7）もある。砂粒は、少量のもの（6、7、9）、多量のもの（4、8）が見られる他、９については、小礫を少量、骨針を微量含む。11 は、須恵器の口縁部片で、器種については、長頸壺等が考えられるが、口縁端部の明確な面取りがなく、やや丸みを帯びる点などか




**第４図　第１号竪穴住居跡平面図及びセクション図(S＝1/60)ならびに出土遺物実測図・拓影図(S＝1/3、1/2)**

ら他の器種の可能性がある。復元径は16.4cmを計る。砂粒、骨針を微量含む。胎土の特徴から五所川原産の可能性が高い。調整は、内外面ともロクロナデで、口唇部はややつまみ出すように内傾させている。12～14は、羽口である。いずれも小破片であるが、12は角筒形、13、14は円筒形を呈するものと思われる。12は、外面の調整にヘラナデが施されている。15は、床面から出土した砥石である。

［時　　期］床面から出土土器がないため明確な時期は特定できないが、覆土出土土器から下限は10C中葉まであると思われる。

**第2号竪穴住居跡（第5、6図）**

［位　　置］MW・MX－487・488グリッドで検出した。基本層序第Ⅲ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］第1号溝跡と第3号竪穴住居跡、第4号竪穴住居跡と重複している。新旧関係は、本遺構が第1号溝跡と第3号竪穴住居跡より古く、第4号竪穴住居跡より新しい。

［平面形・規模］ほぼ方形を呈する。規模は、重複があるため、残存長であるが、上端部で北東壁辺347cm、北西壁辺330cm、南西壁辺335cm、南東壁辺310cm、下端部で北東壁辺300cm、北西壁辺290cm、南西壁辺300cm、南東壁辺280cmを計る。確認面から床面までの深さは最深部で80cmを計る。主軸方位はN－44°－Eである。

［　壁　］ほぼ垂直に立ち上がり、やや脆弱である。

［　床　］地山を床としており、ほぼ平坦で堅緻である。

［壁　　溝］北西壁中央部に断続は見られるが、北東壁、南東・南西壁にかけてほぼ一巡する。幅10cm～12cm、深さ平均4cmを計る。

［ピ　ッ　ト］2基確認した。ピット1は開口部で40～42cm、深さは最深部で30cm、ピット2は開口部で60～80cm、深さは最深部で40cmを計る。ピット2底部から大型の砥石が出土している。

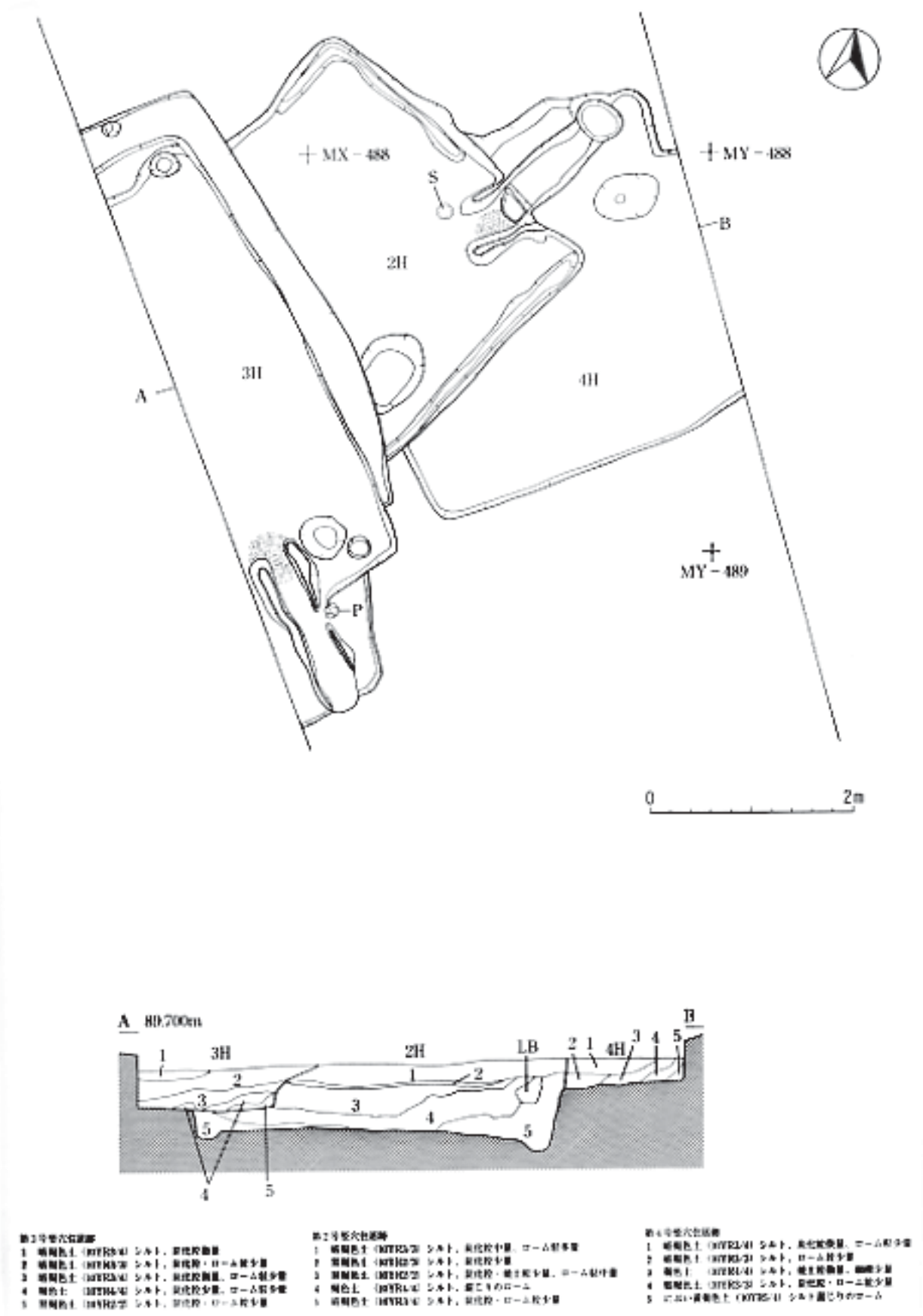
［カ　マ　ド］住居の北東壁のやや南寄りに構築されている。煙道部は半地下式である。袖部は粘土で作られている。火床面は、23cm×35cmの楕円形を呈する。主軸方位はN－44°－Eである。

［堆　積　土］5層に分層した。人為堆積と思われる。

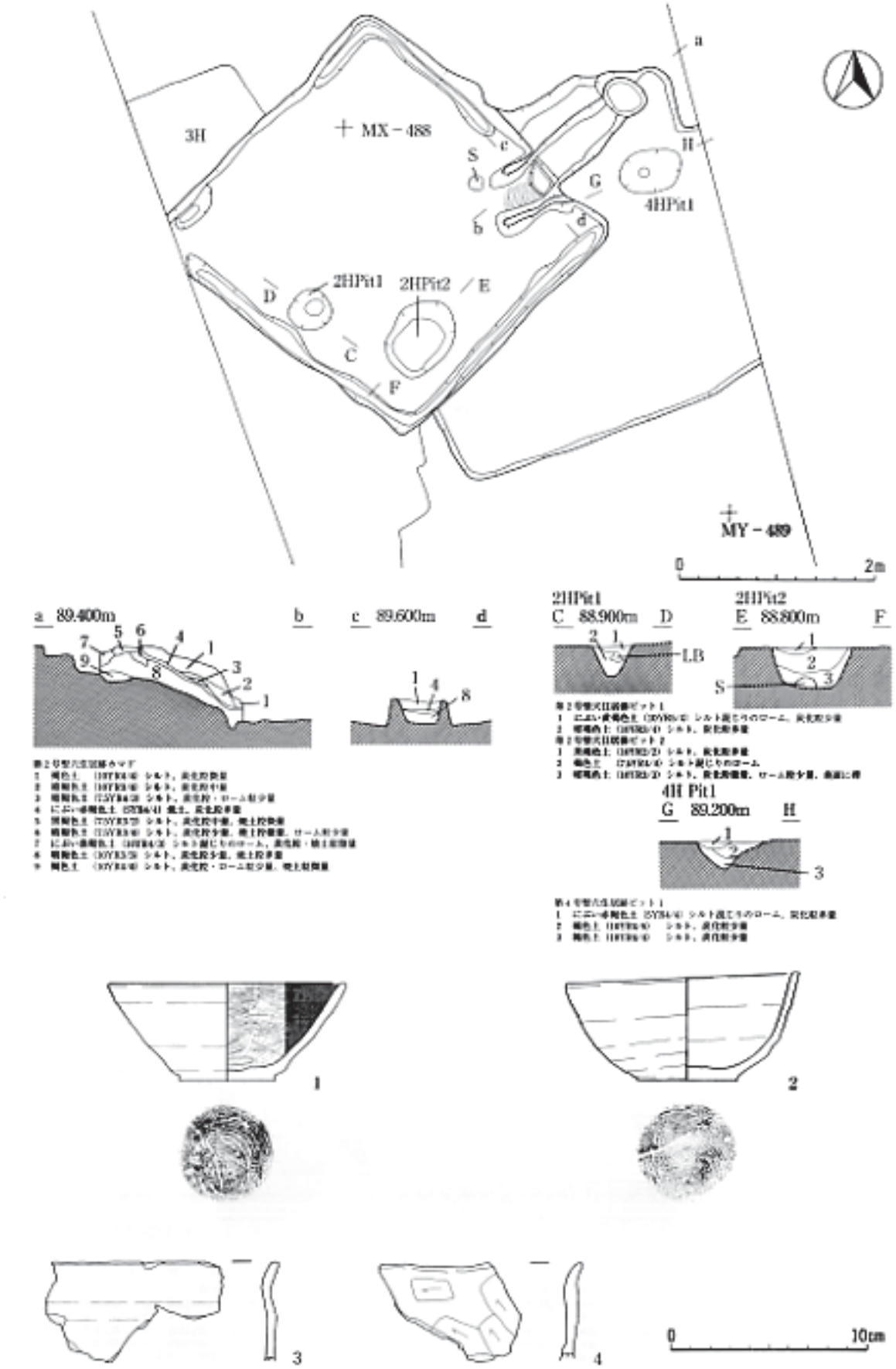
［その他の付属施設］確認されなかった。

［出土遺物］カマドからと覆土からの出土があった。図示したのは、第6図1～4、第7図5～23である。第6図1、2は、土師器坏である。1は、カマド覆土1層からの出土で口径12.4cm、底径5.0cm、器高5.1cmを計る。胴部下半からやや直線的に立ち上がり口縁部付近の器壁はやや厚い。口唇部は丸みを帯びている。ロクロ成形によるもので、内面は黒色処理され、底部側から胴部中半までは放射状のヘラミガキ、胴部中半から口縁部にかけては、横方向のヘラミガキが施される。底部切り離し技法は、右回転の回転糸切によるものである。2は、カマド覆土8層から出土した無調整の土師器坏である。口径12.2cm、底径5.2cm、器高5.7cmを計る。やや丸みを帯びて立ち上がり、口唇部は、平滑である。成形にはロクロが使われ、底部切り離しは、右回転の回転糸切によるものである。

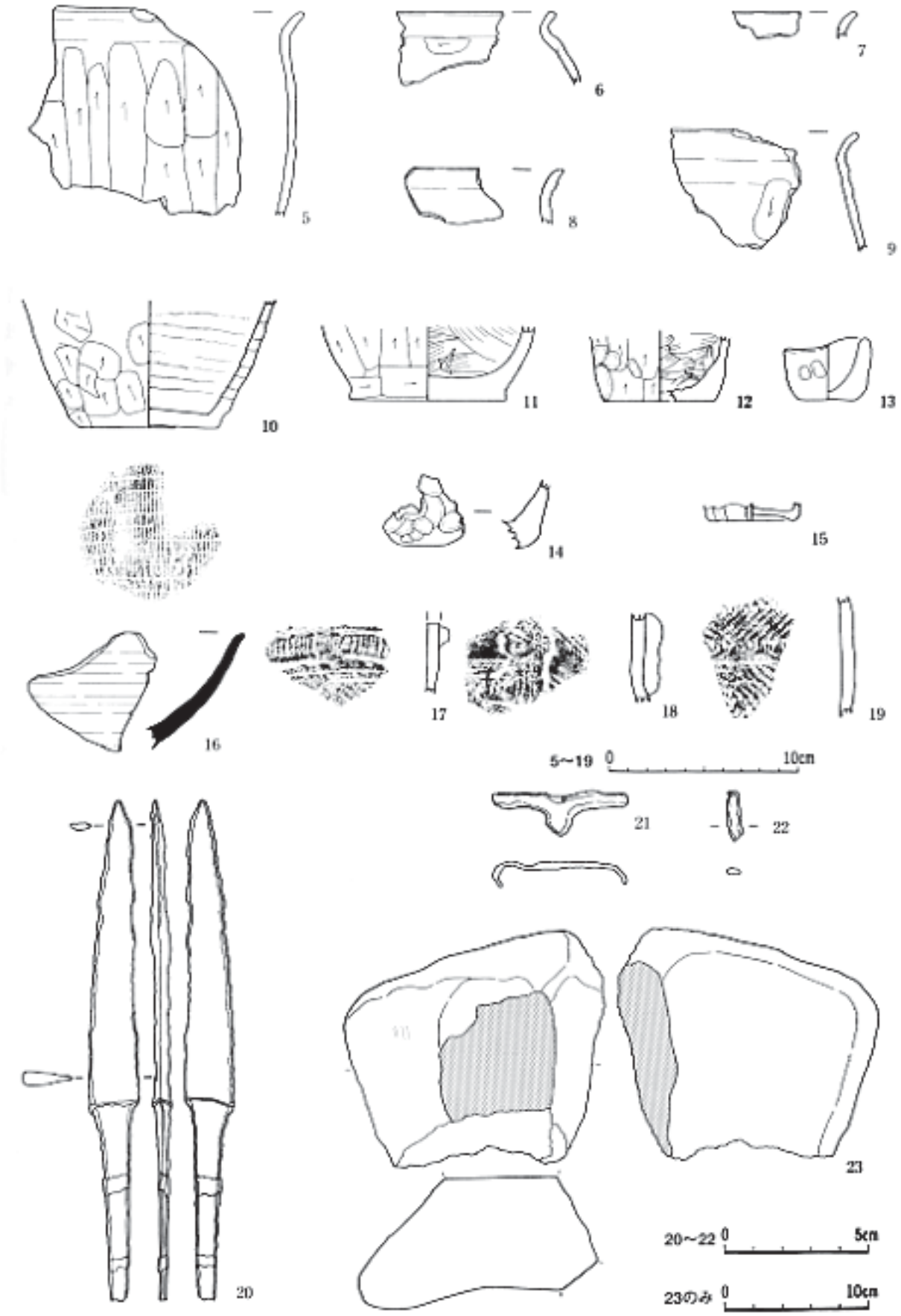
第6図3、4、第7図5～11は、土師器甕である。口縁部が短く、ややゆるやかに外反するものが多く見られる。成形には、ロクロが利用されるものがやや多い。外面の調整には、胴部には、ヘラケズリが多用され、内面調整ではナデもしくはヘラナデが行われる。10は、底部に網代痕が見られる。12～15は、ミニチュア土器の範疇に入る土器である。12は、底径が6.0cmを計り、内外面調整とも甕に利用される技法（ヘラケズリ、ヘラナデ）がそのまま利用されているものの、ユビオサエによる指頭




**第５図　第２～４号竪穴式住居跡平面図及びセクション図（S ＝ 1/60）**




**第６図　第２、４号竪穴式住居跡平面図及び第２号竪穴式住居跡カマドセクション図（S＝1/60）、出土遺物実測図ならびに拓影図①（S＝1/3）**




**第７図　第２号竪穴式住居跡　出土遺物実測図及び拓影図②（S ＝ 1/3、1/2、1/4）**

圧痕が顕著に確認される。13、14は、いずれも手づくねの小型品で、ユビオサエによる成形であると考えられる。15は、他のものと比較してかなり器壁が薄い資料であり、器種判別が難しいがミニチュア土器の範疇に入れることにする。16は、須恵器坏破片である。ロクロ成形によるもので、口唇部は軽く外反し、胴部下半は器壁がやや厚い。色調は、内外面とも灰色を呈する。17～19は、覆土中に混入していた縄文土器であり、縄文時代前期末から中期初頭のものであると考えられる。20は、壁溝内から出土した刀子で、全長17.9㎝、最大幅1.7㎝、最大厚0.5㎝を計る。21、22は、カマドの右袖の脇から出土した銅製品である。出土状況から、カマドの袖の中に混入していた可能性が高い。2片出土したが、接合の可能性をもつものの接点等が見あたらないことから、個々に図化した。21の表面中央部には、金箔が残存しており、金銅製品であったことが想定される。製品名については、刀装具、帯金具等が想定されるが、明確な判断については差し控えたい。23は、ピット2の床面から出土した砥石である。台形柱状の自然礫の頂部と裏面の一部を機能面として利用していたことが想定され、破断面がスリ面を切っている点とピット底部からの出土を併せて考慮した場合、柱穴の礎石として転用された可能性も持ち得ている。

［時　　期］出土遺物から9C末～10C初頭に属するものと思われる。

**第3号竪穴住居跡（第8図）**

［位　　置］MW－487～489グリッドで検出した。基本層序第Ⅲ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］第2号竪穴住居跡と重複しており、本遺構が新しい。

［平面形・規模］調査区外に続くため全体形は確認できないが、ほぼ方形を呈するものと思われる。計測可能な範囲内での規模は上端部で北西壁辺93㎝、北東壁辺470㎝、南東壁辺153㎝、下端部で北西壁辺88㎝、北東壁辺460㎝、南東壁辺148㎝を計り、確認面から床面までの深さは最深部で40㎝を計る。

［　壁　］ほぼ垂直に立ち上がり、やや脆弱である。

［　床　］ほぼ平坦で、堅緻である。第2号竪穴住居跡との重複部分については、第2号竪穴住居跡覆土12、13層部分を地山面とあわせるように削平し、床面を形成している。

［壁　　溝］北西壁側で確認した。

［ピ　ッ　ト］柱穴と思われるものを2基確認した。ピット1は開口部で24～27㎝、深さは最深部で36㎝、ピット2は開口部で24～26㎝、深さは最深部で50㎝を計る。

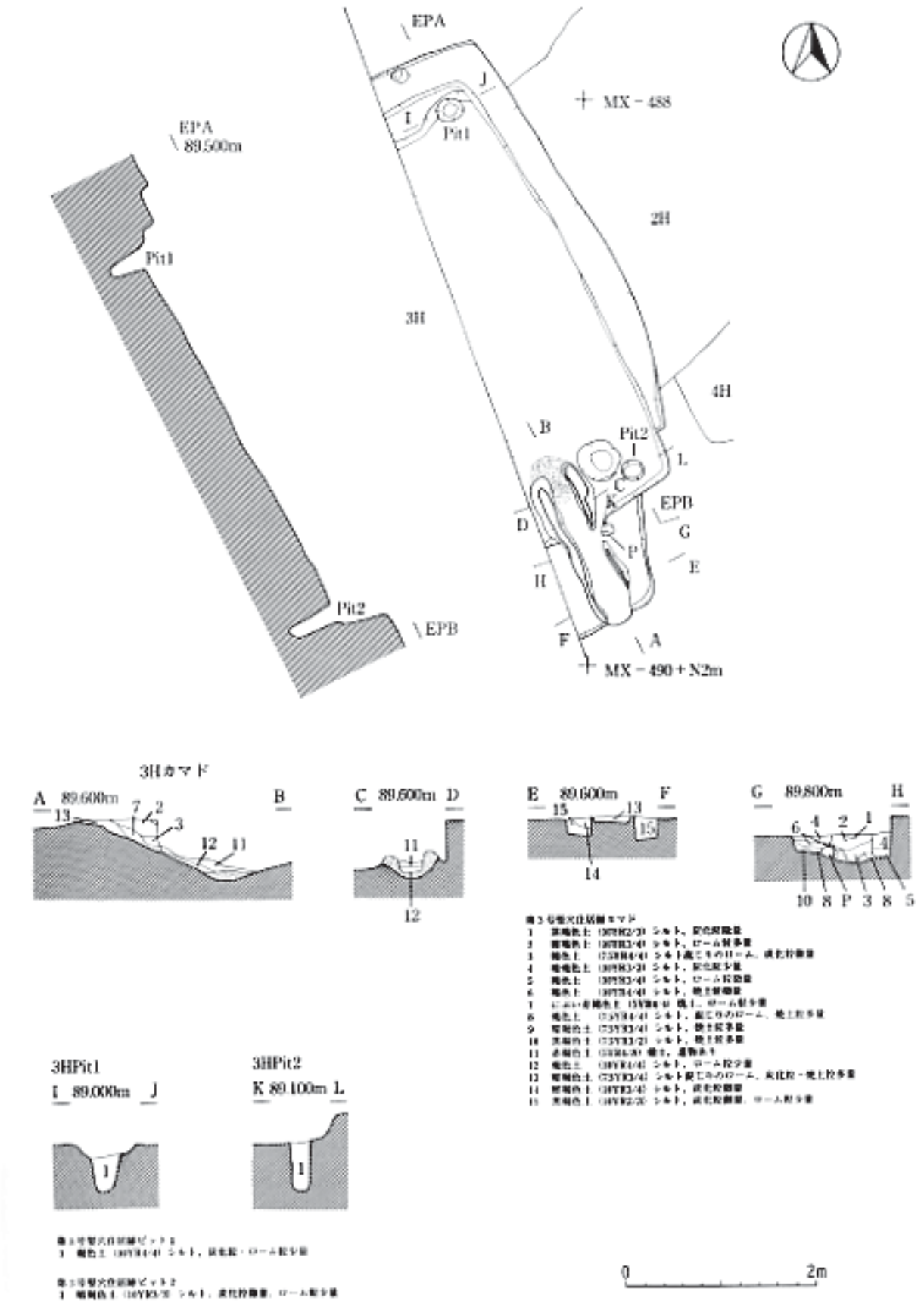
［カ　マ　ド］住居の南西壁東側隅に構築されており、煙道部は半地下式である。袖部は粘土で作られている。火床面は55×45㎝の不整円状に確認された。主軸方位はN－150°－Eである。

［堆　積　土］5層に分層した。人為堆積と思われる。

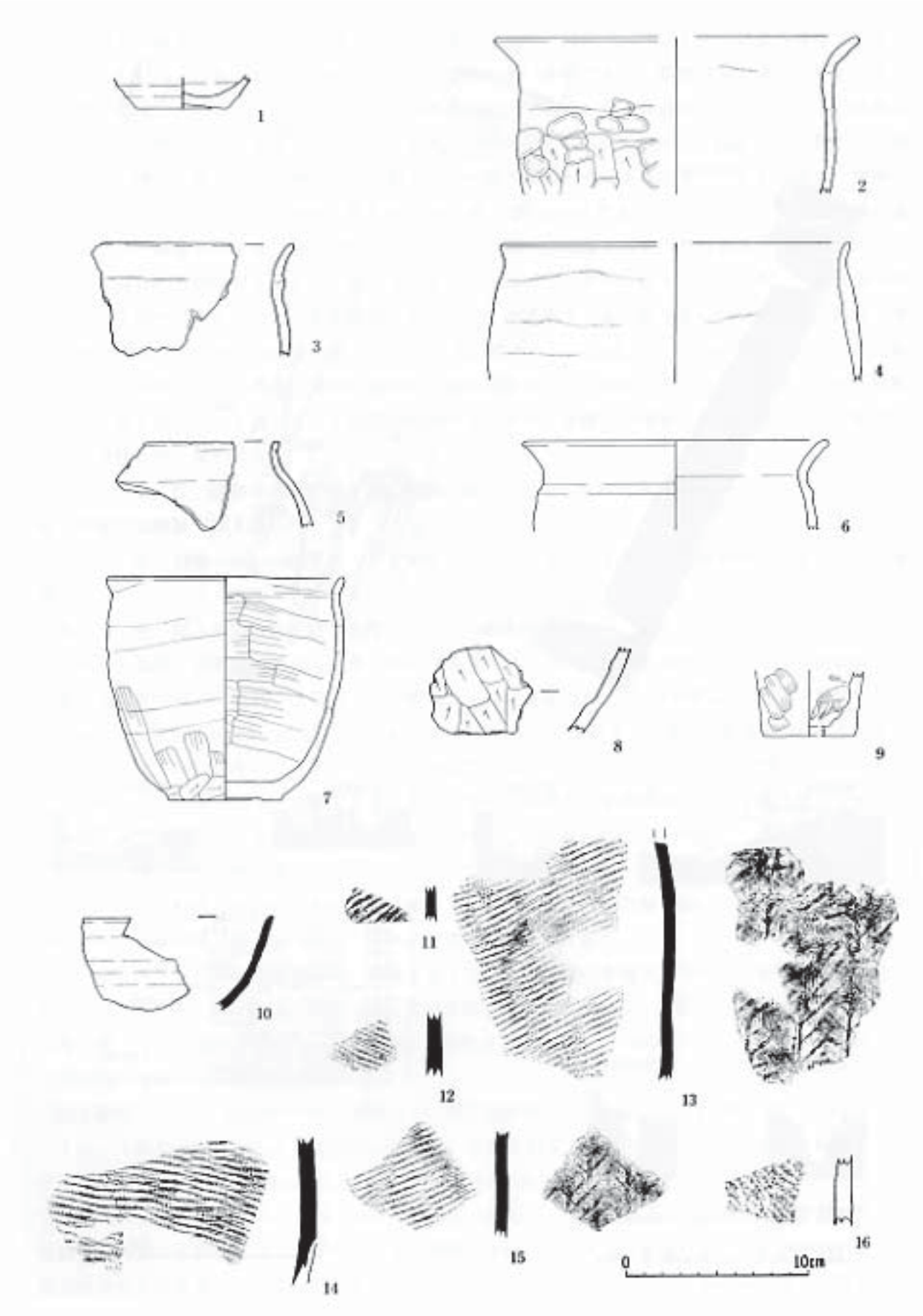
［その他の付属施設］確認されなかった。

［出土遺物］カマドと覆土からの出土があった。出土遺物のうち、図示したのは、第9図1～16である。

1は、土師器坏底部である。底径5.1㎝を計り、砂粒を微量、骨針を多量含む。内外面ともロクロナデによる成形である。底部切り離し技法は、右回転の糸切ののちヘラケズリで再調整が行われている。2～8は、土師器甕である。2は、袖から出土した資料で、復元径20.4㎝を計る。砂粒を少量含み、色調は内外面とも橙色を呈する。外面調整は胴部にかけてヘラケズリが施され、ユビオサエによる圧痕がヘラケズリを消している。内面調整は、ナデによるものである。3は、袖脇から出土の資料で小礫を少量、砂粒を多量含む。色調は、内外面とも浅黄橙色を呈する。調整は内外面とも摩滅が激しく




**第８図　第３号竪穴住居跡平面図及びカマド・ピットセクション図（S＝1/60）**




**第 9 図　第 3 号竪穴住居跡出土遺物実測図及び拓影図（S ＝ 1/3）**

不明である。外面にススが付着している。4は、カマド覆土3層から出土した資料で、復元径19.4㎝を計る。砂粒を少量含み、色調は、内外面ともにぶい黄橙色を呈する。調整は、内外面ともナデによるものである。5は、カマド覆土から出土した資料で、砂粒を多量、骨針を微量含む。色調は外面が灰褐色、内面が橙色を呈する。外面は、摩滅が激しく確認できなかったが、内面調整はナデである。6は、カマド覆土3層から出土した資料で、復元径16.8㎝を計る。砂礫を多く含み色調は外面が橙色、内面が浅黄橙色を呈する。5と同様外面は摩滅しているが、内面調整はヘラナデである。7は、カマド覆土6層から出土した資料で、煙道部の芯材として倒立して置かれた可能性がある。口径11.2㎝、底径6.4㎝、器高12.5㎝を計る。口頸部が短く、口縁が軽く外反する。砂粒を多量、小礫、骨針を微量含む。色調は、外面が黄灰色、内面が灰白色を呈する。調整は、外面が胴部下半にかけてヘラナデ、底部に近接する部分ではヘラケズリが施され、内面調整は、ヘラナデである。底部調整は、ヘラケズリで、砂粒が付いた砂底土器である。8は、覆土出土の胴部破片である。小礫を少量、砂粒、骨針を多量含む。色調は、外面が橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。外面調整は、ヘラケズリ、内面調整はヘラナデである。9は、覆土出土のミニチュア土器で、底径5.0㎝を計る。小礫を少量、砂粒を多量含み、色調は、内外面ともにぶい橙色を呈する。内外面とも調整は、ヘラナデであるが、内面については、幅の狭い工具による鋭いヘラナデである。10～15は、須恵器破片である。10は、覆土出土の坏破片で、砂粒、骨針を少量含む。色調は、外面が灰黄褐色、内面が橙色を呈する。調整は内外面ともロクロナデによる成形である。11から15は、甕の胴部破片である。いずれも胎土中に砂粒を含み、骨針を少量含むもの、小礫を微量含むものがある。外面は、格子状の叩き目が見られ、内面については、13、15が綾杉状の当て具痕が見られる。五所川原産の可能性が高いものと思われる。16は、第2号竪穴住居跡と同様覆土に混入していた縄文土器である。

［時　　期］出土遺物から10C前半に属するものと思われる。

**第4号竪穴住居跡（第5、6図）**

［位　　置］MX－487・488、MY－488グリッドで検出した。基本層序第Ⅲ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］第1号溝と第2号竪穴住居跡に切られている。

［平面形・規模］調査区外に続くため、全体形は確認できないが、計測可能な範囲内での規模は上端部で南東壁辺326㎝、南西壁辺80㎝、下端部で南東壁辺320㎝、南西壁辺75㎝を計り、確認面から床面までの深さは30㎝を計る。

［　壁　］ほぼ垂直に立ち上がり、やや脆弱である。

［　床　］ほぼ平坦で、堅緻である。

［壁　　溝］確認されなかった

［ピ　ッ　ト］1基検出した。開口部で63×43㎝、深さ15㎝を計る。

［カ　マ　ド］確認されなかった。

［堆　積　土］5層に分層した。人為堆積と思われる。

［その他の付属施設］確認されなかった。

［出 土 遺 物］なし

［時　　期］不明である。

（田澤　淳逸・木村　淳一）

## 2．竪穴遺構

**第１号竪穴遺構（第10図）**

［位置］MY－490グリッド第Ⅲ層において黒褐色土の落ち込みを確認した。また、セクション面で第Ⅱ層において掘り込み面を確認した。

［重複］なし

［形状・規模］約半分が調査区外へ延びるため、全体形は不明ではあるが長方形の形状を示すものと推定され、長軸方向は170㎝、深さ26㎝である。

［壁］南壁はやや内湾しながら立ち上がり、確認面までの高さで15㎝である。北壁方向は南壁方向に比べてやや低く、直線的な立ち上がりを持ち、確認面までの高さは5㎝である。比較的堅緻である。

［底］ほぼ平坦である。南壁側、中央部よりやや北壁側において、直径約10㎝の赤変面が２カ所確認できた。また、硬化面は確認されていない。

［堆積土］２層に分層した。第２層は、黒褐色土で焼土粒、炭化物をやや多量含む。また、第１層は、黒褐色土で焼土粒、炭化物を微量、ローム粒を多量含んでいる。土器が出土した面は、第１層下部で、弦状に堆積していた。

［出土遺物］約半分が調査区外へ延びるが、覆土第１層下部から面的に多量の土師器片が出土しており、総出土破片数1,077点に及ぶ。そのほとんどが明赤褐色の色調をもつ土師器で、一部焼成不良（生焼け）の土師器片83片を含んでいる。また、剥離したチップ状の破片が多量に出土しており、剥離面についても十分な焼成を受けている。破裂剥片の可能性を持ち、本遺構の遺物は、土師器焼成の失敗品の一括廃棄としての捉えることができる資料である。出土土器は坏、皿の食膳具に限られるが、器形等が金木町神明町遺跡４号竪穴建物跡出土の資料（青森県教育委員会　1980）に類似する。出土遺物にはいずれも使用痕は認められなかった。

接合・図化に至った資料は、第11図～第13図に示した。ただし、胴部下半から底部にかけて欠損しているものがほとんどで、全体形が追えない資料が多いが、資料数が多いことから記述に際しては、本項のみについて便宜的に分類し、記述することにする。

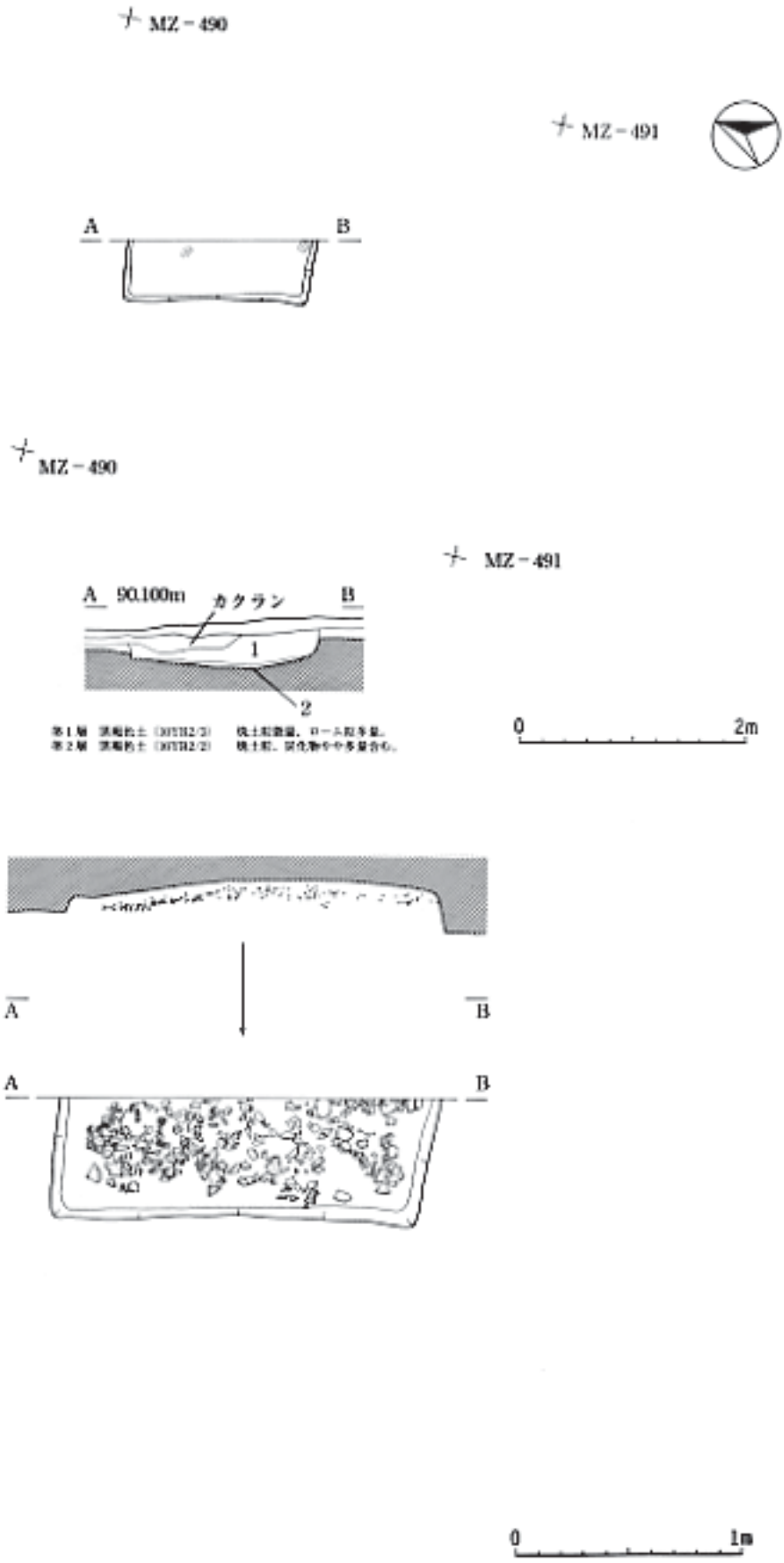
・坏１類　器高指数が40を越える。またはそれに類するタイプ（第11図１～14）

全体形がやや内湾して立ち上がり、口唇部がつまみ出すように外反するものが多いが、ほぼ逆ハの字状に立ち上がるもの（6）も見られる。成形はロクロナデにより、ほとんどが砂粒を少量含むだけである。色調は主に明赤褐色を呈する。底部切り離しは右回転の回転糸切がほとんどである。底部まで延びる個体が少ないため、対象点数は限られるが、器高指数の分かるものについてはばらつきが見られ、41～53.3まで幅を持つ。細分の余地はあるが資料数の少なさから同一のものとした。

第11図１は、口径11.8㎝、器高5.3㎝、底径4.9㎝を計る。胴部中半までやや内湾し、口縁部にかけて外反する。器壁は薄く、口唇部はつまみ出すように外反させている。底部切り離しは、右回転の糸切によるものであると思われる。２は、１よりも深みを持つタイプで、口径12.0㎝、器高6.4㎝、底径5.0㎝を計る。１と同様、内湾して立ち上がり口縁部でやや平滑に外反する。

底部切り離しは右回転の糸切によるものである。３は、口径12.6㎝、器高5.7㎝、底径4.8㎝を計る。ロクロナデによる稜が顕著である。口唇部は、やや直立させるようにつまみあげている。

底部切り離しは、右回転による糸切である。４は、口径13.0㎝、器高5.6㎝、底径5.2㎝を計る。器壁は




**第10図　第1号竪穴遺構平面図及びセクション図（S＝1/60）ならびに遺物微細・垂直分布図（S＝1/30）**

やや厚みを持つが、口縁部付近で外反する。底部切り離しは右回転の糸切によるものである。5は、口径13.0㎝、器高6.2㎝、底径4.8㎝を計る。器壁が薄く口唇部の外反が4に比べて顕著である。底部切り離しは回転糸切によるものである。6は、口径13.4㎝、器高5.5㎝、底径4.8㎝を計る。逆ハの字状に開くタイプであるが、器高指数が41で本類に含めた。底部切り離し技法は、右回転の糸切によるものである。14は、口径11.4㎝、器高5.8㎝、底径5.0㎝を計る。

7～13は、底部が欠損した資料であるが、概ね前述の器形を持つものである。このうち、7、10、13については、口唇部がつまみ出すように外反させている。

・坏2類　器高指数が40未満、またはそれに類するタイプ。（第12図17～32）

器高指数が40以下で全体形が逆ハの字状に立ち上がるものを主体とする。口唇部付近は坏1類と同様つまみ出すように外反させるものが多く見られる。色調は、主に明赤褐色を呈する。成形は、ロクロナデによるもので、胎土の特徴も坏1類と同様砂粒を少量含むのみである。器高指数については、26～32を示し、かなり浅い印象を持つ。また、底径指数は、23のみが底径指数46と底径が大きい他は、40以下に落ち着く。

17は、口径14.6㎝、器高4.2㎝、底径5.6㎝を計る。口唇部のつまみ出しの部分が短いのが特徴である。底部切り離しは、回転糸切によるものである。器高指数は28である。18、19、20、23は、口径が13㎝以下のもので、この類の中においては小型である。全体形を想定できるのは、23のみで、口径12.0㎝、器高3.9㎝、底径5.6㎝を計る。口唇部はややシャープに外反する。器高指数は32である。

25、27～32は、口径が14～15㎝を示す資料である。口縁の立ち上がりは、ほぼ同様であるが、口唇部がやや丸みを帯び、つまみ出すように外反させるものも見られる。

・坏3類　1類・2類に比べ大型なタイプ。（第11図15，16）

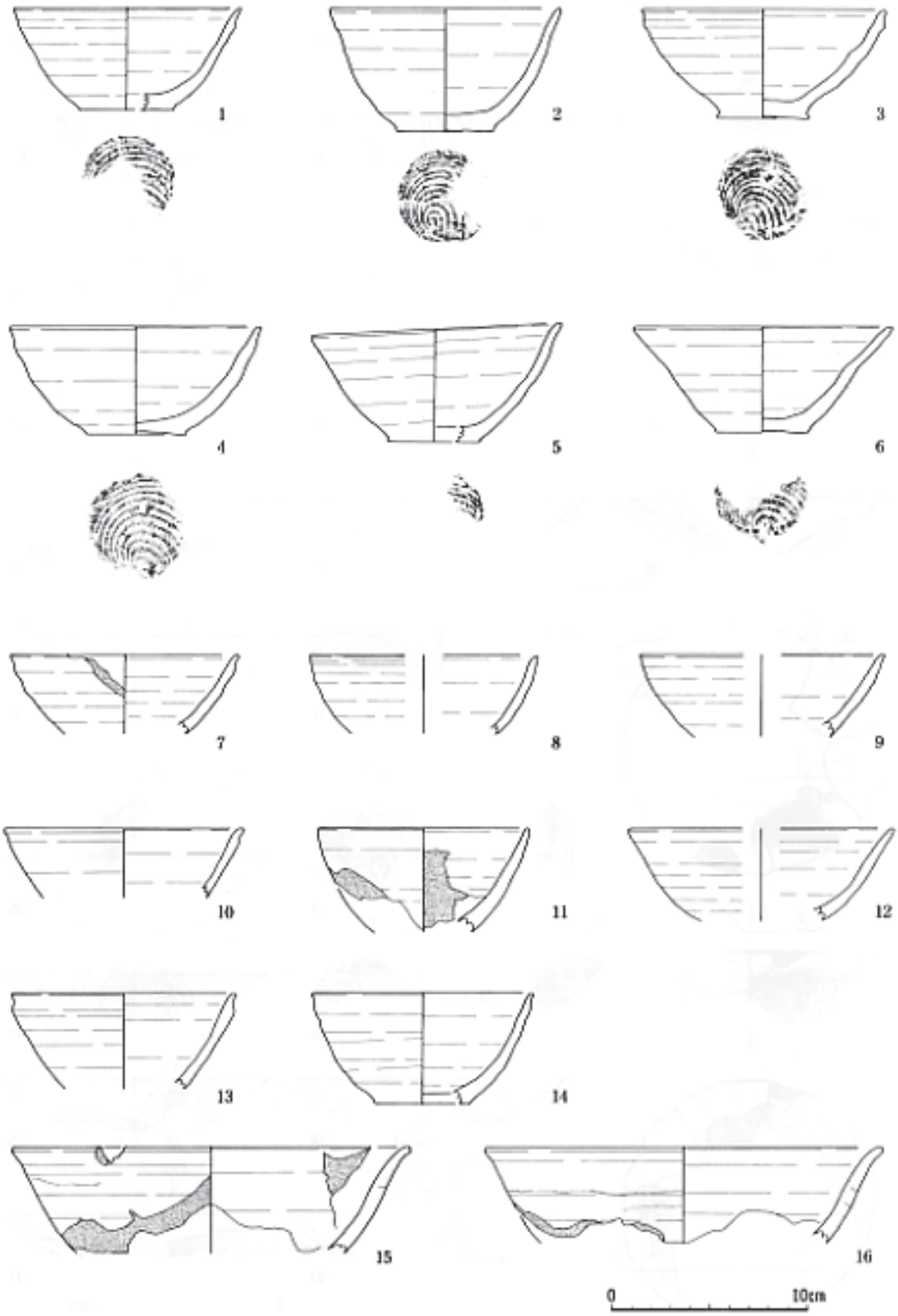
口径が20㎝を越える大型坏である。やや丸みを帯び立ち上がり、口縁部付近を軽く外反させている。口径が大型のため、粘土を付け足したのか、器壁に接合痕が見られるという点が他のタイプと異なる。15、16とも復元径20.6㎝を計る。同一個体の可能性を持ちうるが、接合しなかったため個々に図化した。

・皿1類　皿状を呈するタイプ（第12図33～第13図44）

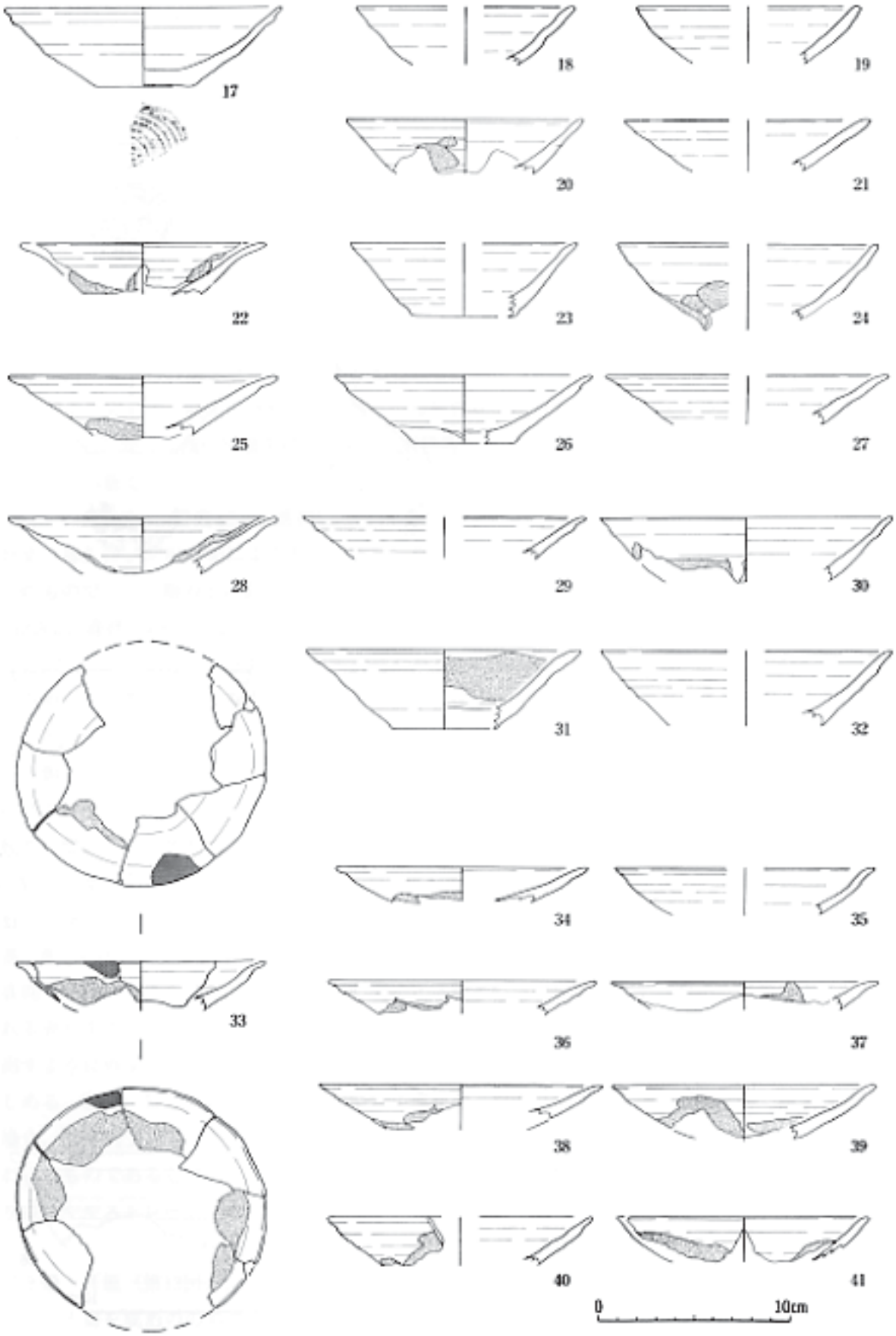
底部まで復元できた個体がないため、明確に坏2類との境界は引けなかったが、皿形の土器と考えられる資料を本類に含めた。坏に比べてかなり浅く、丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部からつまみ出すように外反させるものが多い。口径は、13㎝から17㎝までの幅をもち、13～14㎝のものが主体をしめる。33は、接合資料間で黒斑の非整合が確認できた資料である。黒斑が破片間で非整合を見せた場合、破片同士が別々の条件で焼成を受けた可能性を示すものであり、この資料は、土師器焼成に関わったものであると言える。42は、焼成不良品であり、色調は暗赤褐色を呈する。口縁部の立ち上がりは、ややストレートである。

・皿2類　耳皿（第13図45、55）

坏形の土器を成形ののちユビオサエにより、耳皿を作り上げているものと推定される。ただし、歪みがひどく、全周する可能性が低いものと思われる。また、底部と思われる破片資料が第13図55である。




**第 11 図　第 1 号竪穴遺構出土遺物実測図及び拓影図①（S ＝ 1/3）**

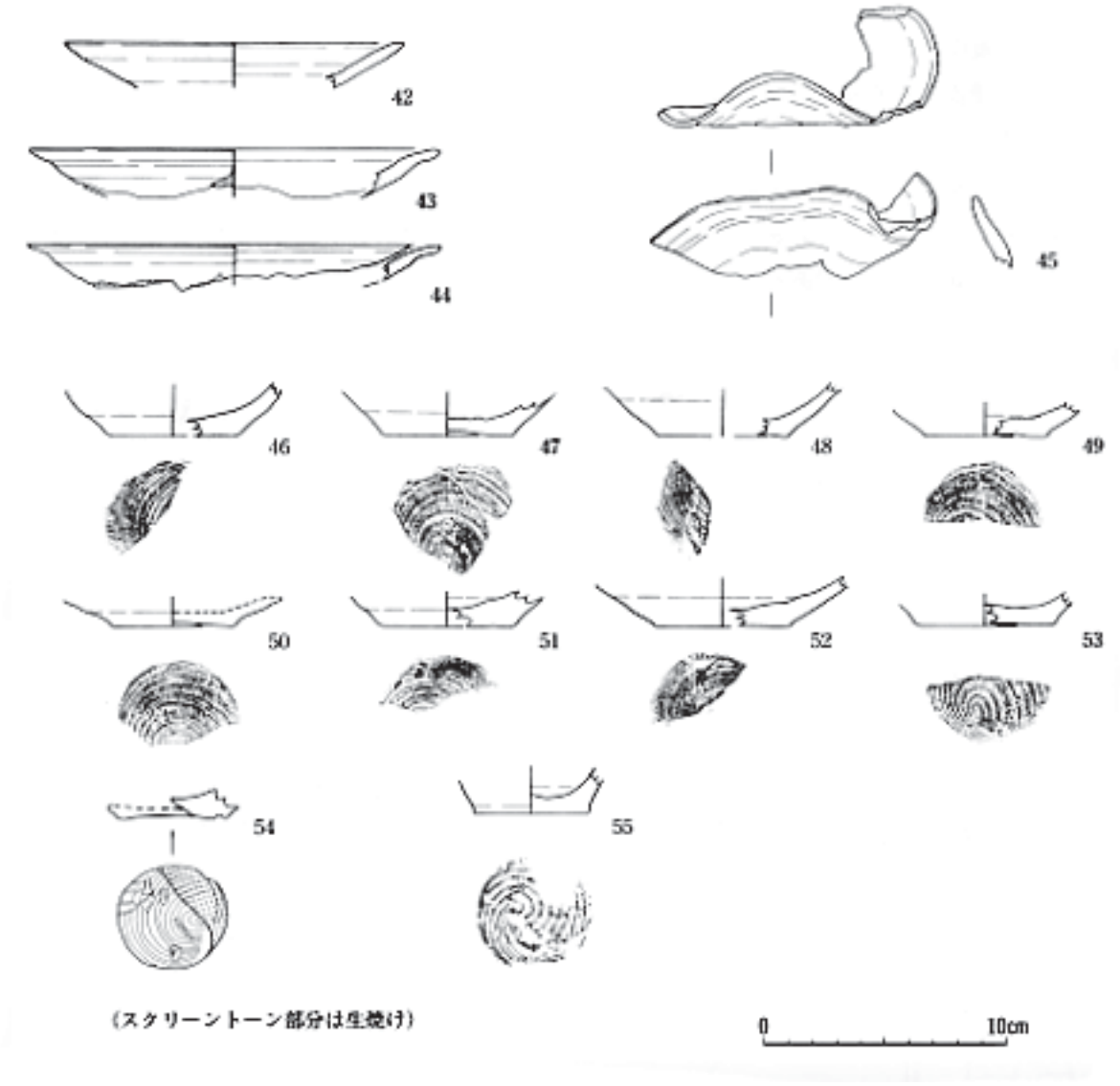



**第 12 図　第 1 号竪穴遺構出土遺物実測図及び拓影図②（S ＝ 1/3）**

坏形、皿形土器の底部とは異なり、やや、直立した立ち上がりを持つ。45との接点はないため、別々に図示したが、おそらく本類に属するものと思われる。底径は、4.8㎝を計り、底部切り離しは、右回転の回転糸切（離し糸切）によるものである。

また、類型化不可能な底部破片のうち、第13図54については、接合資料であるが、焼成良好な破片と、焼成不良（生焼け）の破片が接合した例である。

（木村　淳一）




**第13図　第1号竪穴遺構出土遺物実測図及び拓影図③（S＝1/3）**

## 3．土坑

**第1号土坑（第14図）**

［位置］MX－489グリッドで検出した。

［重複］ピット4と重複している。ピット4が新しい。

［平面形・規模］不整長楕円形を呈する。開口部で235×115cm、底面で85×65cm、最深部で約50cmを計る。

［壁・床］北壁側は、ゆるやかに外反し立ち上がる。南壁側は、やや直立して立ち上がる。脆弱である。また、床面はほぼ平坦である。

［堆積土］2層で、自然堆積と思われる。

［出土遺物］出土しなかった。

**第2号土坑（第14図）**

［位置］MX－490グリッドで検出した。

［重複］なし

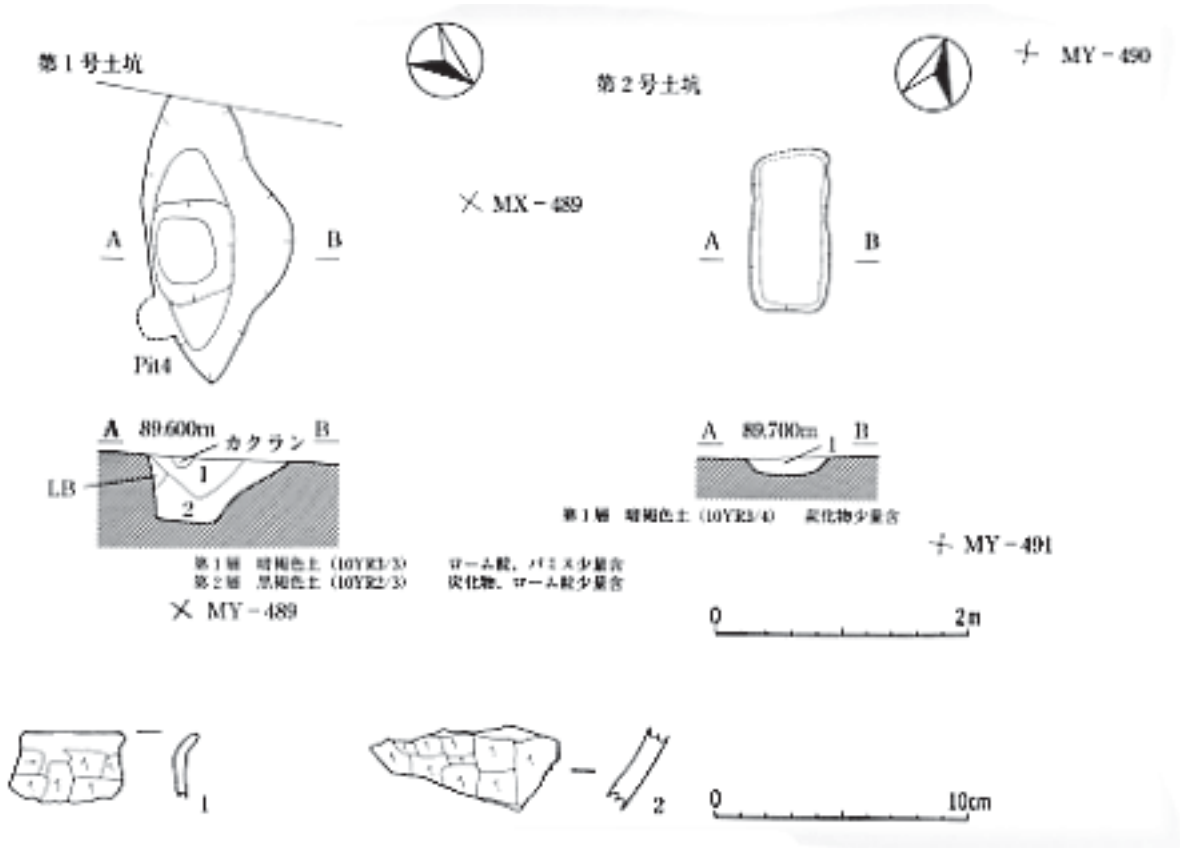
［平面形・規模］長方形を呈する。開口部で130cm×65cm、底面で115cm×48cm、最深部で12cmを計る。

［壁・床］壁面はややゆるやかに外反して立ち上がる。やや堅くしまっている。床面はほぼ平坦であり堅くしまっている。

［堆積土］1層で、炭化物が少量混入している。

［出土遺物］第14図1、2に図示した土師器片2点が出土した。いずれも土師器甕で外面調整にヘラケズリ、内面調整はナデである。

（木村　淳一）



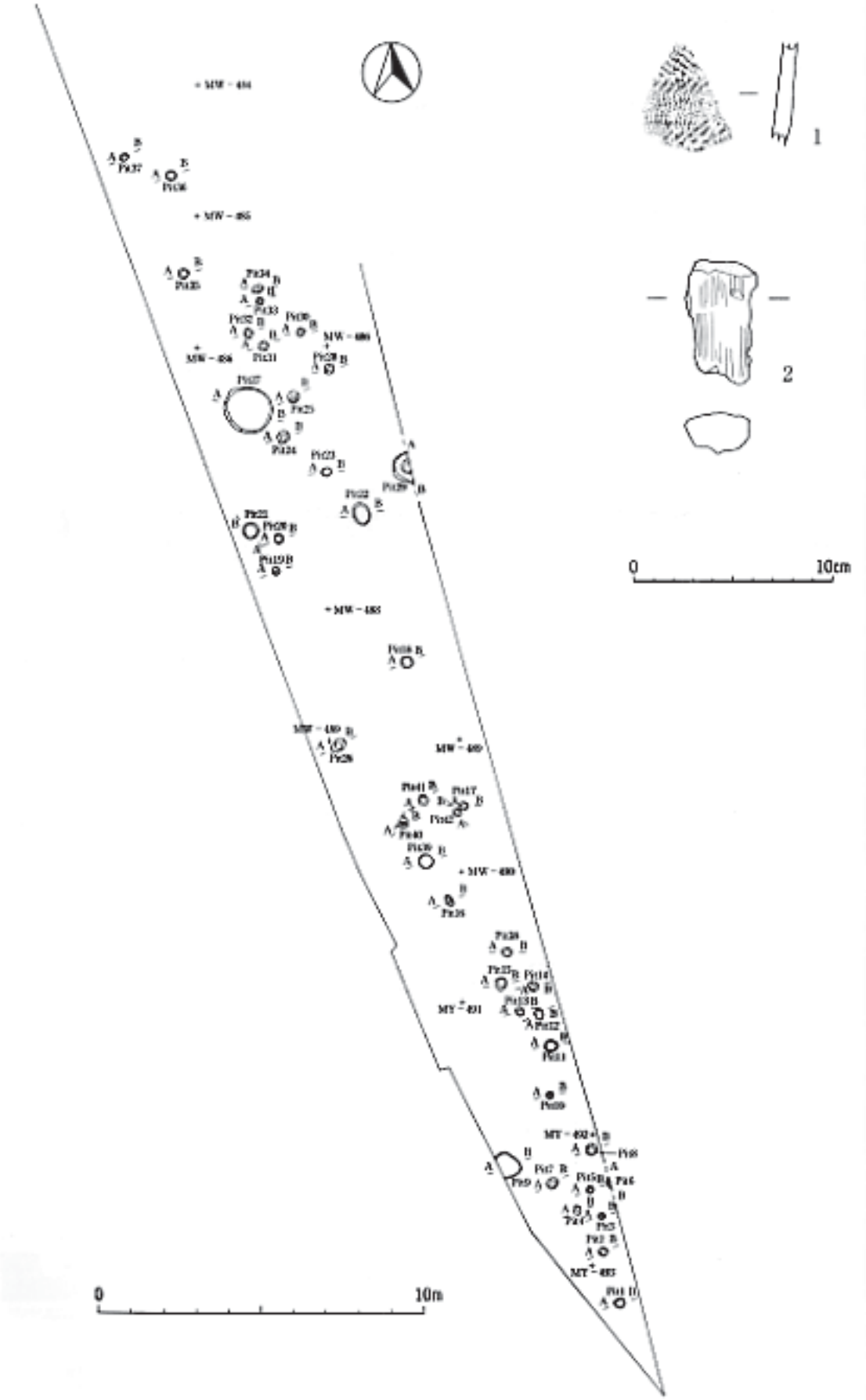

**第14図　第1・2号土坑平面図及びセクション図（S＝1/60）ならびに第2号土坑出土遺物実測図（S＝1/3）**

## 4．小ピット（第15、16図）

調査の結果、41基の小ピットを検出した。全て第Ⅲ層で確認した。堆積土は大部分が1層である。遺物はほとんど出土しておらず、Pit－27から、縄文時代中期と思われる土器片1点、羽口1点が出土しているが、流れ込みと考えられる。調査区のほぼ全域に分布しているが、明確な配列を確定できるものは少ない。Pit－18が第4号竪穴住居跡の覆土上層を掘り込んでおり、周辺に位置する竪穴住居跡や土坑と関連する配置を示すものがほとんど見られないことから、これらの小ピットは、平安期以降に構築されたものと考えられる。ここでは、個々のピットについての詳述は割愛し、セクション図と配置図、観察表の掲載にとどめる。

（設楽　政健）

**第15図　小ピットセクション図（S＝1/60）**




**第16図　小ピット平面図（S＝1/180）及びPit27出土遺物（S＝1/3）**

## 第２表　小ピット観察表

| 番号 | グリッド | 形状 | | 計測値(cm) | | | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 平面形 | 断面形 | 開口部 | 坑底部 | 深さ | |
| 1 | ＮＡ－494 | 円形 | 円筒形 | 32×31 | 27×21 | | 13 |
| 2 | ＮＡ－493 | 円形 | 円筒形 | 27×27 | 18×17 | | 14 |
| 3 | ＮＡ－493 | 円形 | 円筒形 | 22×21 | 14×13 | | 14 |
| 4 | ＭＺ－493 | 楕円形 | 円筒形 | 29×21 | 10×10 | | 15 |
| 5 | ＭＺ・ＮＡ－493 | 円形 | 円筒形 | 22×22 | 16×16 | | 14 |
| 6 | ＮＡ－493 | 円形？ | 円筒形 | 31× | 19× | | 30 |
| 7 | ＭＺ－493 | 円形 | 円筒形 | 36×30 | 26×20 | | 40 |
| 8 | ＭＺ・ＮＡ－493 | 円形 | ナベ底(平) | 36×31 | 24×16 | | 6 |
| 9 | ＭＺ－493 | 不整形 | ナベ底(平) | 83× | 71× | | 8 |
| 10 | ＭＺ－492 | 円形 | 円筒形 | 22×22 | 13×10 | | 14 |
| 11 | ＭＺ－492 | 円形 | ナベ底(平) | 40×35 | 35×23 | | 19 |
| 12 | ＭＺ－492 | 楕円形 | ナベ底(平) | 32×26 | 28×19 | | 11 |
| 13 | ＭＺ－492 | 円形 | 円筒形 | 26×25 | 16×13 | | 16 |
| 14 | ＭＺ－491 | 円形 | 円筒形 | 31×30 | 16×15 | | 20 |
| 15 | ＭＺ－491 | 円形 | 円筒形 | 38×21 | 24×23 | | 21 |
| 16 | ＭＹ－491 | 楕円形 | 円筒形 | 36×24 | 13×12 | | 21 |
| 17 | ＭＹ・ＭＺ－490 | 円形 | 円筒形 | 28×24 | 20×17 | | 22 |
| 18 | ＭＹ－489 | 円形 | 円筒形 | 36×25 | 29×27 | | 21 |
| 19 | ＭＹ－488 | 円形 | ナベ底(丸) | 24×22 | 11×10 | | 9 |
| 20 | ＭＸ－488 | 円形 | ナベ底(平) | 30×27 | 23×19 | | 8 |
| 21 | ＭＸ－488 | 円形 | ナベ底(平) | 49×47 | 40×39 | | 9 |
| 22 | ＭＹ－488 | 楕円形 | 円筒形 | 67×53 | 54×42 | | 29 |
| 23 | ＭＸ・ＭＹ－487 | 円形 | 円筒形 | 28×27 | 22×21 | | 21 |
| 24 | ＭＸ－487 | 不整形 | 円筒形 | 41×34 | 21×19 | | 21 |
| 25 | ＭＸ－487 | 円形 | 円筒形 | 35×35 | 16×16 | | 35 |
| 26 | ＭＹ－489・490 | 不整形 | ナベ底(丸) | 49×34 | 5×4 | | 16 |
| 27 | ＭＸ－487 | 円形 | ナベ底(平) | 153×143 | 135×125 | | 18 縄文土器1点、羽口1点 |
| 28 | ＭＸ・ＭＹ－487 | 円形 | 円筒形 | 33×30 | 16×15 | | 21 |
| 29 | ＭＹ－487・488 | 円形？ | ナベ底(平) | 92× | 26× | | 52 |
| 30 | ＭＸ－486 | 円形 | 円筒形 | 26×24 | 13×13 | | 14 |
| 31 | ＭＸ－486・487 | 円形 | 円筒形 | 31×27 | 18×16 | | 19 |
| 32 | ＭＸ－486 | 円形 | 円筒形 | 30×23 | 17×14 | | 24 |
| 33 | ＭＸ－486 | 円形 | ナベ底(丸) | 23×23 | 12×9 | | 13 |
| 34 | ＭＸ－486 | 楕円形 | ナベ底(丸) | 34×21 | 16×12 | | 19 |
| 35 | ＭＷ－486 | 円形 | 不整形 | 32×30 | 23×22 | | 12 |
| 36 | ＭＷ－485 | 円形 | ナベ底(丸) | 32×28 | 23×22 | | 9 |
| 37 | ＭＷ－485 | 円形 | 円筒形 | 26×22 | 19×15 | | 10 |
| 38 | ＭＺ－491 | 円形 | 円筒形 | 30×28 | 19×17 | | 21 |
| 39 | ＭＹ－490 | 円形 | 不整形 | 46×45 | 40×35 | | 13 |
| 40 | ＭＹ－490 | 円形 | 不整形 | 38×33 | 9×9 | | 30 |
| 41 | ＭＹ－490 | 円形 | 円筒形 | 30× | 8×4 | | 24 |

## 5．溝跡

本調査区内では、第Ⅲ層において４条の溝状の痕跡を確認している。しかしながら、新旧関係においてその他の遺構に比べてもっとも新しいことが想定され、また、第１号竪穴住居跡のセクションにおいて第2号溝跡が第1号竪穴住居跡の最上層の覆土を切った形で確認されていることから古代以降の構築が想定されるため、溝状遺構とは称せず溝跡と呼称することにした。出土遺物は、いずれの溝跡からも出土していない。

**第１号溝跡（第17図）**

［位置］MZ－491グリッドからMY－487グリッドにかけて第Ⅲ層で溝状の落ち込みを確認した。

［重複］第２号溝跡、第２・４号竪穴住居跡と重複する。新旧関係は第１号溝跡のほうが新しい。

［形状・規模］直線状を呈する。最大幅35cm、全長1,150cm、深さ5cmを計る。

［堆積土］１層である。

**第２号溝跡（第17図）**

［位置］MY－492グリッドからMZ－490グリッドにかけて第Ⅲ層で溝状の落ち込みを確認した。また、第４図第１号竪穴住居跡セクションにおいて第Ⅰ層直下において掘り込みを確認している。

重複］第１号溝跡、第１号住居跡と重複する。新旧関係は、第１号住居跡より新しく、第１号溝跡より古い。

［形状・規模］直線状を呈する。調査区外へ延びるため全体の規模については不明であるが、調査区内においての規模については、最大幅50cm、全長580cm、深さ13cmを計る。

［堆積土］１層である。

**第３号溝跡（第18図）**

［位置］MZ－492グリッド、第Ⅲ層で溝状の落ち込みを確認した。第４号溝跡とほぼ平行に位置する。

［重複］なし

［形状・規模］直線状を呈する。調査区外へ延びるため全体の規模については不明であるが、調査区内においての規模については、最大幅30cm、全長215cm、深さ10cmを計る。

［堆積土］１層である。

**第４号溝跡（第18図）**

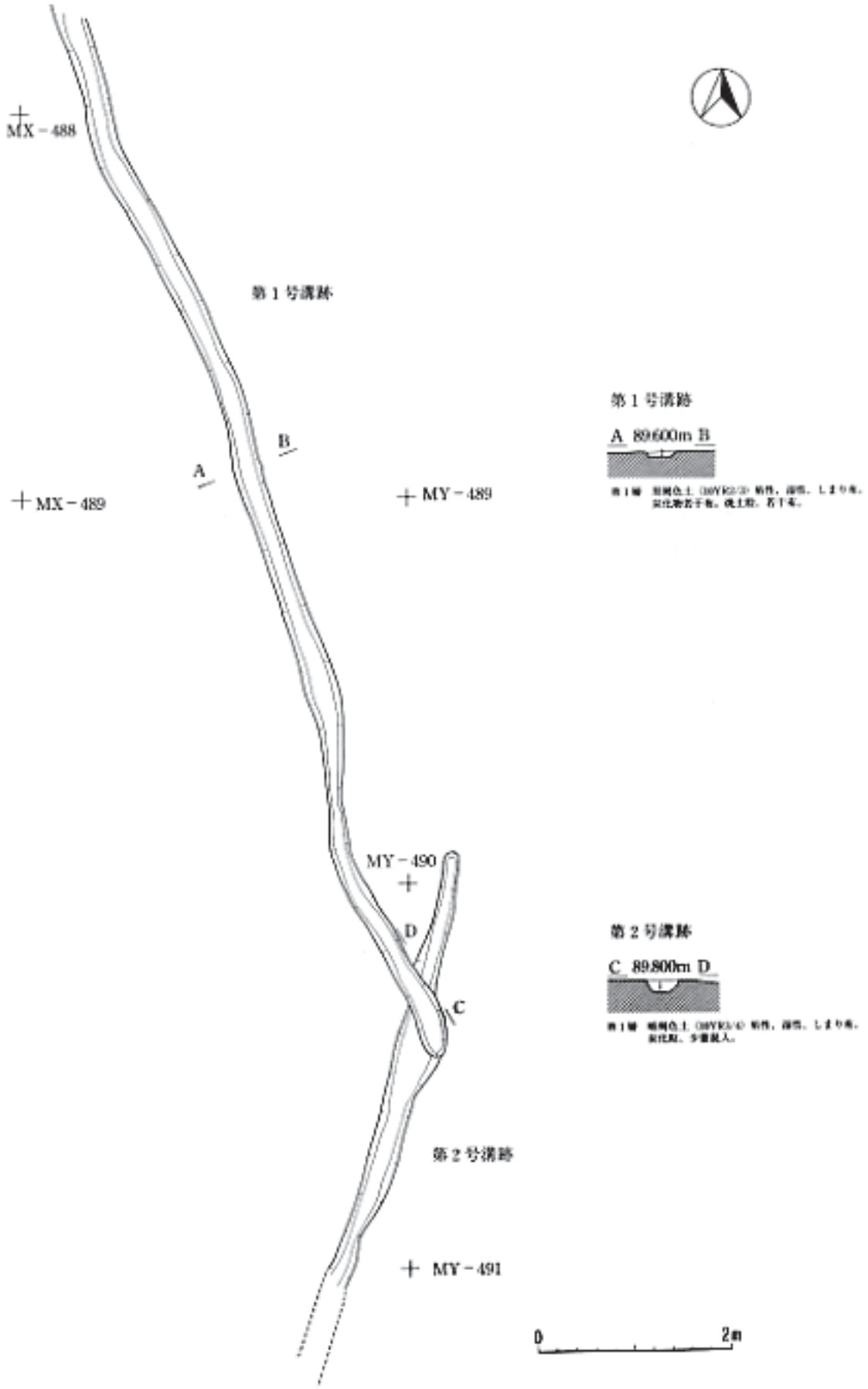
［位置］MZ－492グリツド、第Ⅲ層で溝状の落ち込みを確認した。第３号溝跡とほぼ平行に位置する。

［重複］なし

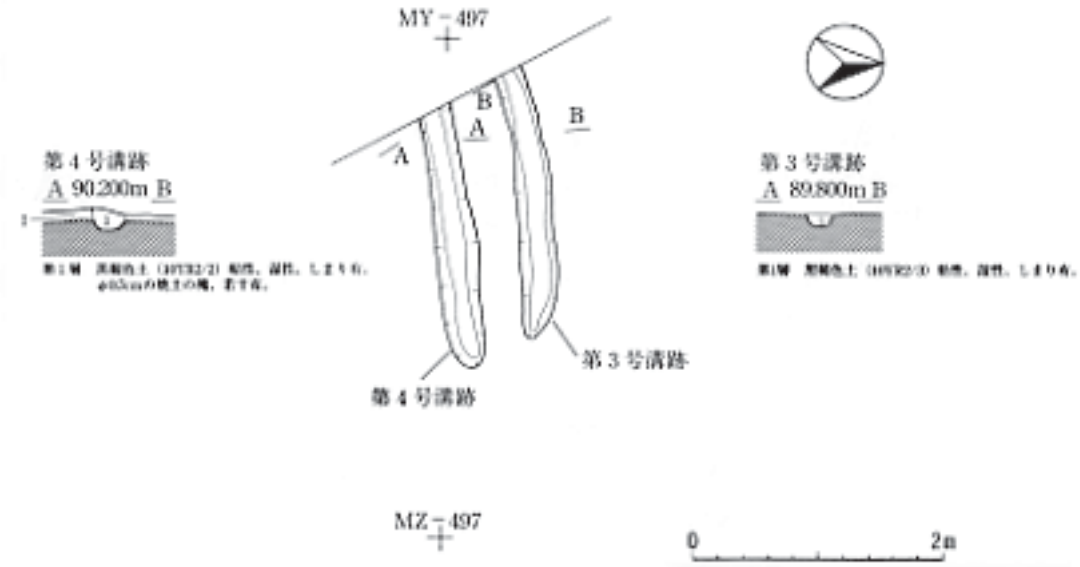
［形状・規模］直線状を呈する。調査区外へ延びるため全体の規模については不明であるが、調査区内においての規模については、最大幅35cm、全長210cm、深さ15cmを計る。

［堆積土］１層である。

（木村　淳一）




**第17図　第１・２号溝跡平面図及びセクション図（S＝1/60）**




**第18図　第３・４号溝跡平面図及びセクション図（S＝1/60）**

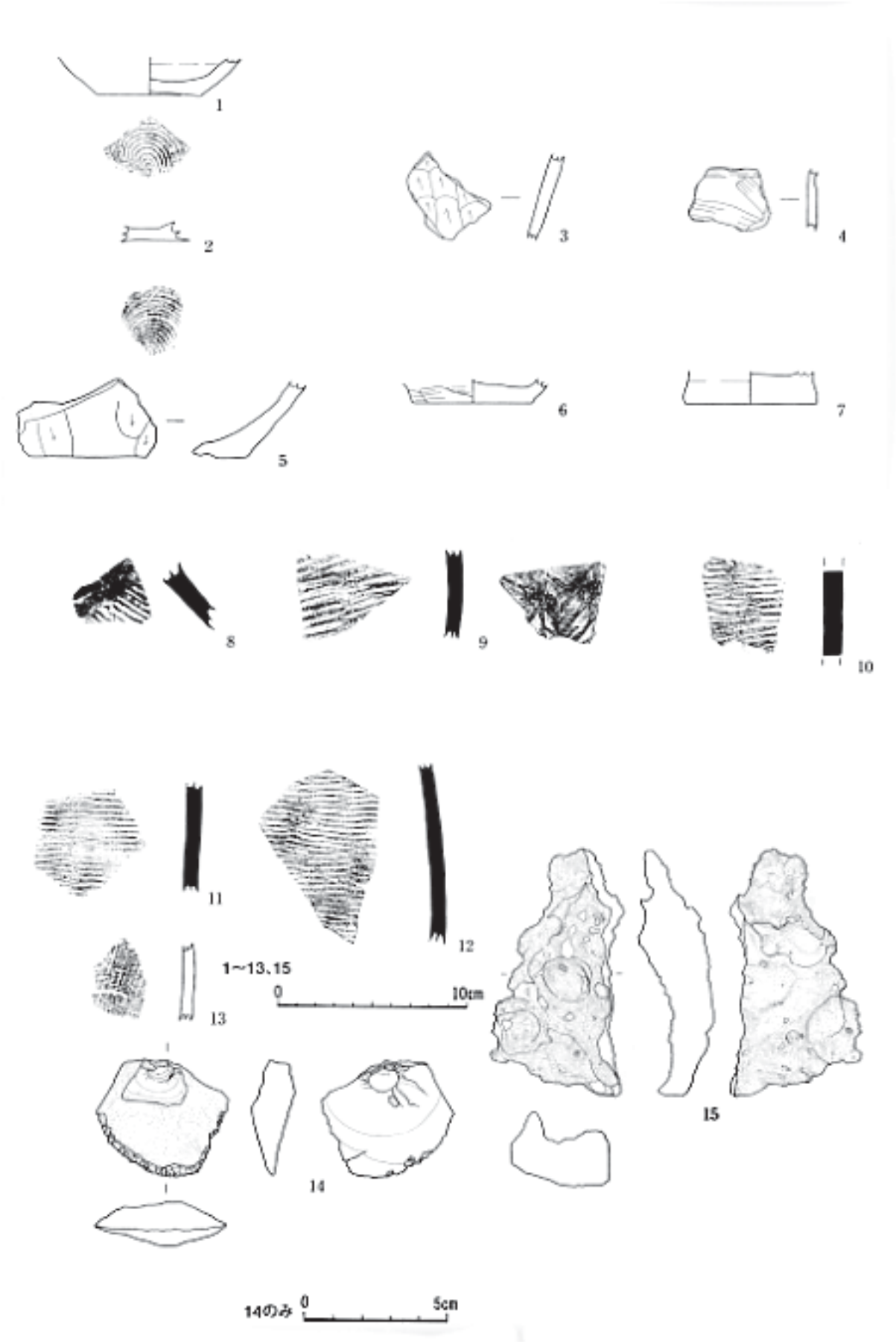
## ６．遺構外出土遺物（第19図）

本調査区は、削平を受けているため、遺構外出土遺物についても検出した遺構に帰属する可能性が強い資料が多く含まれる。

第19図－1、2はそれぞれMX・MY－490、488で出土した土師器坏の底部で、いずれも色調は赤褐色を呈する。砂粒は少なく、第１号竪穴遺構出土の土器に類似する。ロクロ成形で底部切り離しは右回転の糸切である。3～7はいずれも土師器甕である。4は、MX・MY－490出土の胴部片で、砂粒を多く含む。色調は外面がにぶい褐色、内面が褐灰色を呈する。外面調整はヘラケズリ、内面調整はヘラナデである。5は、表採品の胴部片で、砂粒を多量、骨針を微量含む。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。外面調整はヘラケズリ、内面調整はヘラナデである。6は、MX・MY－490出土の胴部下半から底部片で、底径は6.5cmを計り、砂粒を多量、骨針、赤色粒を微量含む。色調は外面がにぶい褐色、内面が橙色を呈する。外面調整はヘラナデ、内面調整はナデ、底部調整はヘラケズリである。7は、MX・MY－490出土の底部破片で、底径は7.2cmを計り、砂粒を多量含む、外面調整、内面調整は摩滅のため明瞭ではないが、内面調整についてはナデを施したものと思われる。底部には、砂粒が付着した砂底土器である。

8～12は、須恵器甕の胴部破片である。8は、MW・MX－488出土の口頸部から胴部にかけての破片で、砂粒を少量含む。色調は、外面が濃灰色、内面が灰色を呈する。外面調整は、叩き目が見られ、内面調整はナデである。9は、MW・MX－488出土の胴部片で、砂粒、骨針を少量含む。色調は、内外面とも濃灰色を呈する。外面調整は、叩き目が見られ、内面には綾杉状の当て具痕が見られる。胎土、当て具痕の形状から第３号竪穴住居跡覆土中より出土のものと同一個体の可能性が高い。10は、表採品の胴部片で、砂粒を少量、骨針を微量含む。色調は、外面が濃青灰色、内面が濃灰色を呈する。外面調整は、叩き目が見られる。11は、MY－491出土の胴部片で、砂粒を少量、骨針を微量含む。色調は、外面が濃灰色、内面が濃青灰色を呈する。外面調整は、叩き目、内面調整はヘラナデである。12は、MY－491出土の胴部片で、砂粒を中量、骨針を微量含む。色調は、内外面とも濃灰色を呈する。外面調整は、叩き目が見られ、内面調整は、ナデである。13は、MW－488から出土した縄文土器深鉢の胴部片である。摩滅が激しいがRLの斜縄文が施されている。14は、MX－490出土の縄文時代の不定形石器である。15は、MW－485出土の鉄滓である。

（木村　淳一）




**第 19 図　遺構外出土遺物実測図及び拓影図（S ＝ 1/3、1/2）**

# 第Ⅳ章　分析と考察

## 第１号竪穴遺構について

本調査は、約360㎡という限られた面積であり、また調査区についても鋭角な二等辺三角形状であり、遺構については部分的に検出する例が多く、その全体形を把握できないものが多い。本遺構も約半分が調査区外に延びており、出土した遺物そのものも約半分残存している可能性が高い。

本遺構の性格については、二側面の要素が伺える。一つは、土師器生産における焼成遺構としての可能性についてであり、もう一つは、一括廃棄による一括遺物としての評価である。

ここでは、その二側面について分析・考察を行う。

1. 土師器生産における焼成遺構について

土師器生産に関わる研究は、1968年の岩手県江刺市瀬谷子窯跡群の発掘調査によってはじめて土師器焼成遺構の認識がなされるようになった。研究史の概略については、近年刊行された窯跡研究会による『古代の土師器生産と焼成遺構』において徳澤啓一氏によってまとめられているのでそちらを参照されたい(徳澤　1997)。

土師器焼成遺構としての認定において、木立雅朗氏は、必要条件として以下の三要素をあげている（木立　1997)。

①掘り込んだだけの単純な土坑

②土坑床面が赤色に焼けていること

③炭・灰・赤色焼土の塊～粒が原位置で確認され、その土坑で火を使ったことが明確であること

また、③の必要条件を提示する以前に③として土器焼成の痕跡を示す遺物がその遺構で焼成されたと認定される形で出土することを提示している。しかしながら必要条件を満たす十分条件の設定が難しいことから③の事項を削除事項とし、上記の事項に置き換えて述べている。

一方、削除事項について秋山浩三氏は、「黒斑等の遺物属性からみた土器焼成遺構」の中で削除事項についての十分条件の設定について黒斑の観察に主眼をおいて、さらには黒斑以外の遺物属性に触れ焼成遺構の十分条件設定について検討を行っている（秋山　1997)。

①から③までの要素は、遺構そのものの判断、削除事項については、遺物主眼ならびに遺構という検討要素を持ち得ている。

第１号竪穴遺構の出土遺物については、土師器焼成について可能性を持ち得ている資料であり、本遺構の検討については検出状況ならびに遺物の属性について、①から③ならびに削除事項を通して検討を行うことにする。

・遺構から見た要素（①～③の十分条件）について

本遺構の概略については、P.19に記述したとおりであるが、①の条件については十分条件を持ちうる。

②については、底面において赤変した部分が見られるが、面的に広がるものではなく、また、硬化面も見られない。望月氏分類の$C_2$類（望月　1997）に該当する可能性を持ち得ているが、本遺構についてはかなり極所的な部分に限られている。ただし、主燃料の薪の量が少なく藁などを用いた一、二度の焼成においては、床面が面的に赤変することがない場合も考慮に入れなければならない。

また、③については底面直上の層位に炭化物、焼土粒等をやや多量に含むが、粒状に混入した状況であった。そのため、明確に本遺構における焼成を示すものとはなりえなかった。

以上のように遺構そのものから見た側面においては、直接的に土師器焼成とは結びつかないが、①～③の条件との照合において、底面の赤変などから焼成の可能性についてはわずかながらであるがあるものと思われる。

・削除事項（土器焼成の痕跡を示す遺物ならびに遺構における焼成の要素）について

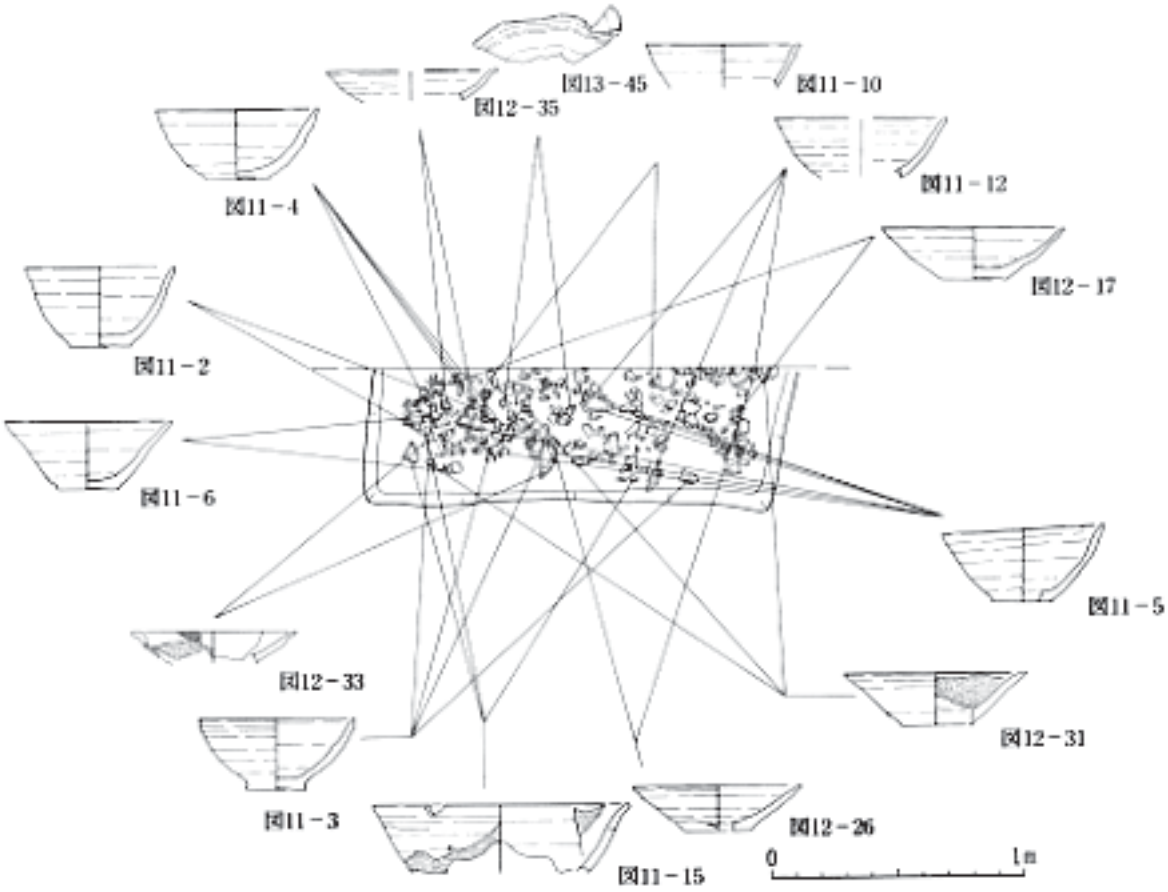
この遺構から出土した遺物は約半分の精査ながら総破片数1,077片の土器破片の出土がある。そのうち、焼成が表面的に良好な資料がほとんどを占める中、完全な生焼けの土器片（一部粒化したものもある）83片、ならびに焼成粘土粒4個が併せて出土している。なかでも特筆すべき点は、多量の剥離片（チップ）状の土器片が多量に出土し、さらに破断面側の部分についても良好な焼成を受けている例が多い点にある。また、復元した土器の中で略完形に近い形で復元できた個体がほとんどなく、口縁部から体部にかけて残存する個体が多く、体部下半から底部にかけて残存する例が少ないという点が特徴的である。接合した資料においても、チップと同様に剥離している部分が体部中半から下半にかけて認められる資料が多い。

個体そのものに目を向けてみると、器面の焼成が表面的に良好で、剥離がない資料についても断面観察をしたところ、口縁部から体部中半にかけては器壁内部まで焼成が行き届いているが、その同一個体内の体部下半から底部にかけての器壁内部では、むしろ生焼けに近いような断面を持ち得るものが多い。この点は、出土した土器のうち体部下半から底部にかけてを欠損する個体が多い点、剥離した破片の中において体部から底部にかけての資料が多い点から考えて、火の通りやすい口縁部から体部中半においては焼成が行き届くが体部下半から底部にかけて表面上は焼成を受けるが器壁内部から破裂を起こした可能性が非常に高い。

焼成中の破裂については、二側面が考えられる。一つは、乾燥が不十分で、土器胎土中に水分が残存し、それが急激な焼成によって、熱膨張に器壁が耐えられなくなり破裂する場合である。もう一つは、胎土の中に空気が残存していて、それが、焼成時の急激な温度変化により膨張し、破裂する場合が考慮できる。

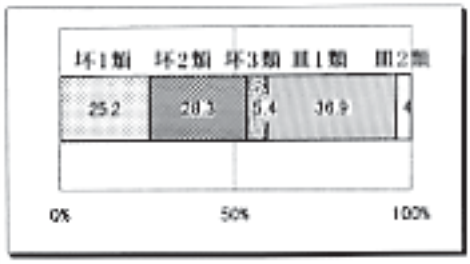
本資料については、剥離した部分の観察において、空気膨張の破裂痕を示すようなクレーター状の穴がほとんど見受けられないこと、前述の断面観察により、胎土中の水分の残存による膨張による破裂であると考える。よって剥離片については、土師器焼成時の破裂剥片として捉えることができる。

また、図13－54の底部破片のように焼成状況の異なる破片（生焼けと焼成良好品）の接合が見られる点、図12－33に見られるように接合破片間における黒斑の非整合資料が見られる点、第13図－45の耳皿についても焼き歪みが見られる点、生焼け土器片の出土などから本遺構出土の土器群そのものについては、土師器焼成が行われていた可能性を示す資料であるといえよう。

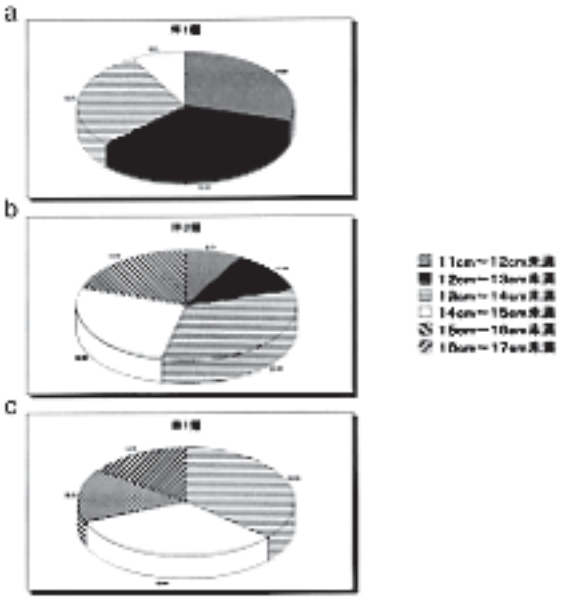



第 20 図　接合資料破片分布図（S ＝ 1/30）

総個体数12.42個体




第 3 表　組成比




第 4 表 a ～ c　口径別個体数比率

ただ、本遺構における出土遺物の焼成については、①から③の必要条件に対して明確な十分条件を満たすものが少ない点、また、遺構の赤変面と出土遺物の焼成状況がつり合いがとれていないことと併せて、第20図に示した復元個体内における接合資料の破片の分布状況において、破裂という状況を踏まえたとしても散逸しすぎており、本遺構で焼成を受けたという根拠を示せない内容であることから、消極的帰結とすることにしたい。

しかしながら、野木遺跡内における土師器焼成の根拠としては、非常に可能性が高い資料であり、平成8年度から県埋蔵文化財調査センターで、平成9年度には青森市教育委員会が加わり合同で青森中核工業団地に係る野木遺跡の発掘調査が実施されているが、県埋蔵文化財調査センターで調査した部分において本遺構と形態が類似し、床面に赤変面を持つ遺構が分布し、また本遺構から出土した土器と焼成が類似する土器がかなり離れた地点で出土している。

本遺構から出土した土器については、急激な高温状態で焼かれた視覚的に焼成良好品であり、修正不可能な資料としていわゆる「キズモノ」の土器として捉えることができる資料であり、野木遺跡における土師器焼成と製品としてなり得たものについての集落内における自家流通ならびに自家消費にとどまる可能性を持ち得ており、今後継続される発掘調査の成果によって同様の製品が集落内において出土する可能性が高いものと思われる。

2. 一括資料としての評価について

本遺構から出土した資料は、坏、皿、耳皿という食膳具が出土しているが、煮沸具としての甕、坩等の土器は出土していない。これは、一括廃棄として評価した場合、使用痕がない点を踏まえて、土師器焼成における坏・皿類のみだけの焼成＋廃棄ということが想定され、前述の第20図に示したように特定の意図的廃棄という状況は把えることができない。そのため、消費側というより、生産側のセット関係となり、消費地側として同時期の煮沸具とのセット関係を追うことできないが、同時期における食膳具のバリエーションについて検討を行う。

本遺構から出土した器種は、大まかに坏、皿であるが、各種類ともバリエーションを持ち得ており、体部破片の残存率が少ないため細分はできないがP.17において器高指数40を越える深みを持つ坏（坏1類）、器高指数40以下の浅いタイプ（坏2類）、口径20㎝を越える大型の坏（坏3類）、浅い皿状を呈するタイプ（皿1類）、耳皿（皿2類）という分類を行った。

口縁部残存計数法を利用した組成比は、第3表のとおりである。出土遺物については調査区外に約半分が残存する状況ではあり、また、坏2類と皿1類の境界が明瞭でない点を踏まえて参考資料という扱いにとどめるが、坏と皿の組成比は、約6：4になる。しかしながら、深みのある坏1類に対して、より平坦な坏2類、皿1類の組成比が凌駕している点が特徴的である。また、大型坏、耳皿は、全体の約5%以下の比重を占めるのみである。

口縁部形態については、外反が目立ち、特に口唇部付近を意図的につまみ出すように外反させる資料もある（第11図－7，10，13）。これらの資料については、他遺跡出土の土師器坏には見られないタイプの資料であり、本遺跡の特徴として読みとることができる。口唇部付近への意識については、皿についても当てはまる。直線的に立ち上がる部類とともに、口縁部付近を意図的に押しつぶし、外へ延ばすタイプが見られる。同様の器形については、蛍沢遺跡第12号住居跡出土の皿（青森市蛍沢遺跡発掘調査団　1979）にも類似している。また、小皿と呼ばれる類に入るようなタイプ

は見られない。底部は、いずれも回転糸切無調整のものであると推定され、高台が付くようなタイプは存在しないものと思われる。

次に全体形の追えない資料についても器種毎の口径のまとまりについて触れてみる。第4表に示したように坏1類については、口径12㎝前後にほとんどのまとまりを示す。また坏2類ついては、口径13～14㎝前後にまとまりを示している。また、皿については、口径13～14㎝前後のものが主体を占める。これについては、食膳具としての必要とされる法量が特定のものに対する指向性を持ち得ている可能性を持っており、今後、集落内における食膳具の組成、法量分布等を検討することによって、時期的変遷、空間的変遷を追うことができるものと考える。

（木村　淳一）

| 番号 | 出土地点 | 層位 | 種別 | 器種 | 部位 | 法量 (cm) ① | ② | ③ | 色調 色調外面 | 色調内面 | 胎土 礫 | 砂 | 骨 | 焼成 | 遺存率 | 外面調整 | 内面調整 | 底部調整 | 備考 | 整理番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 図4-1 | 1H | フク2 | 土師器 | 坏 | 口縁部 | — | — | — | 橙 | にぶい橙 | — | 多 | — | 並 | — | ロクロナデ | ロクロナデ | — | | H-14 |
| -2 | 1H | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部 | (12.2) | — | — | 浅黄橙 | にぶい橙 | — | 多 | — | 並 | 0.222 | ロクロナデ | ロクロナデ | — | | H-32 |
| -3 | 1H | フク1 | 土師器 | 坏 | 底部 | — | — | 4.8 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | — | 多 | — | 並 | 1 | 摩滅 | 摩滅 | 糸切(回転) | 赤色粒少量含 | H-98 |
| -4 | 1H | フク2 | 土師器 | 甕 | 口縁部 | — | — | — | 橙 | 橙 | — | 多 | — | 並 | — | ロクロナデ | ロクロナデ | — | | H-15 |
| -5 | 1H | フク2 | 土師器 | 甕 | 口縁部 | — | — | — | 橙 | にぶい橙 | — | 少 | — | 並 | — | ロクロナデ | ロクロナデ | — | | H-11 |
| -6 | 1H | フク1 | 土師器 | 甕 | 口縁部 | — | — | — | にぶい褐 | にぶい橙 | — | 少 | — | 並 | — | ナデ | ナデ | — | | H-12 |
| -7 | 1H | フク2 | 土師器 | 甕 | 口縁部 | — | — | — | にぶい褐 | 黒褐色 | — | 少 | — | 並 | — | ナデ、ヘラケズリ | ナデ | — | | H-29 |
| -8 | 1H | フク1 | 土師器 | 甕 | 口縁部 | — | — | — | にぶい褐 | にぶい橙 | — | 多 | — | 並 | — | ナデ | ナデ | — | | H-30 |
| -9 | 1H | フクド | 土師器 | 甕 | 口縁部 | — | — | — | 橙 | 橙 | 少 | 少 | 微 | 並 | — | ナデ | ナデ | — | | H-13 |
| -10 | 1H | フク6 | 土師器 | 甕 | 胴部 | — | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | | 多 | | 並 | — | ヘラケズリ | 摩滅 | — | | H-101 |
| -11 | 1H | フク1 | 須恵器 | 長頸壺？ | 口縁部 | (16.4) | — | — | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | — | 微 | 微 | 良 | 0.1 | ナデ | ナデ | — | | H-1 |
| -12 | 1H P-2 | 床面 | 羽　口 | | — | — | — | — | にぶい橙 | 橙 | 多 | 多 | 微 | 並 | — | ヘラナデ | — | — | | H-46 |
| -13 | 1H P-1 | フク4 | 羽　口 | | — | — | — | — | 明赤褐 | にぶい褐 | 少 | 多 | — | 並 | — | — | — | — | | H-45 |
| -14 | 1H P-1 | フク4 | 羽　口 | | — | — | — | — | 黒褐色 | 橙 | — | 少 | — | 並 | — | — | — | — | 外面溶結物付着 | H-48 |
| -15 | 1H | 床 | 砥　石 | | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | スリ、重さ99.5g、凝灰岩 | T-2 |
| 図6-1 | 2H カマド | フク1 | 土師器 | 坏 | 口縁部～底部 | 12.4 | 5.1 | 5 | にぶい橙 | 黒 | — | 多 | — | 並 | 0.125 | ロクロナデ | ヘラミガキ | 糸切(回転) | P—6 | H-21 |
| -2 | 2H カマド | フク8 | 土師器 | 坏 | 口縁部～底部 | 12.2 | 5.7 | 5.2 | にぶい橙 | にぶい橙 | — | 多 | — | 並 | 0.6 | ロクロナデ | ナデ | 糸切(回転) | P—11 | H20 |
| -3 | 2H | フク7 | 土師器 | 甕 | 口縁部～胴部 | — | — | — | にぶい黄褐 | にぶい黄褐 | 少 | 多 | — | 並 | — | ナデ | ナデ | — | | H-24 |
| -4 | 2H | フク7 | 土師器 | 甕 | 口縁部～胴部 | — | — | — | 橙 | にぶい褐 | 少 | 多 | 微 | 並 | — | ナデ、ヘラケズリ | ナデ | — | | H-25 |
| 図7-5 | 2H カマド | フク8 | 土師器 | 甕 | 口縁部～胴部 | — | — | — | 明赤褐 | 明赤褐 | 少 | 多 | 少 | 並 | — | ナデ、ヘラケズリ | ナデ | — | 赤色粒少量含、スス付着 | H-23 |
| -6 | 2H | フク1 | 土師器 | 甕 | 口縁部～胴部 | — | — | — | 黒褐 | にぶい褐 | — | 少 | — | 並 | — | ヘラケズリ | ナデ | — | | H-43 |
| -7 | 2H | フク1 | 土師器 | 甕 | 口縁部 | — | — | — | にぶい褐 | 褐灰 | — | 中 | — | 並 | — | ナデ | ナデ | — | | H-31 |
| -8 | 2H | フク1 | 土師器 | 甕 | 口縁部 | — | — | — | にぶい橙 | にぶい橙 | 少 | 少 | — | 並 | — | 摩滅 | 摩滅 | — | | H-44 |
| -9 | 2H | フクド | 土師器 | 甕 | 口縁部～胴部 | — | — | — | 橙 | にぶい橙 | — | 多 | — | 並 | — | ナデ、ヘラケズリ | ヘラナデ | — | | H-42 |
| -10 | 2H カマド | フク8 | 土師器 | 甕 | 胴部～底部 | — | — | 7.5 | 橙 | 橙 | 少 | 多 | — | 並 | — | ヘラケズリ | ナデ | 綱代痕 | P—10 | H-22 |
| -11 | 2H カマド | フク1 | 土師器 | 甕 | 胴部～底部 | — | — | 8.4 | にぶい赤褐 | 黒褐 | 微 | 多 | — | 並 | — | ヘラケズリ | ヘラナデ | ヘラナデ | P—7 | H-73 |
| -12 | 2H | フク1 | 土師器 | ﾐﾆﾁｭｱ | 胴部～底部 | — | — | 6 | にぶい褐 | 明赤褐 | — | 少 | — | 並 | — | ヘラケズリ | ヘラナデ | ナデ | 指頭圧痕有 | H-34 |
| -13 | 2H | フク7 | 土師器 | ﾐﾆﾁｭｱ | 口縁部～底部 | 4.5 | 3.4 | 3 | 黄褐 | 明褐 | — | 少 | — | 並 | — | ユビオサエ | ナデ | ユビオサエ | 指頭圧痕有 | H-36 |
| -14 | 2H | フク1 | 土師器 | ﾐﾆﾁｭｱ | 胴部～底部 | — | — | — | にぶい橙 | にぶい橙 | — | 少 | — | 並 | — | ユビオサエ | ヘラナデ | — | 指頭圧痕有 | H-38 |
| -15 | 2H | フクド | 土師器 | ﾐﾆﾁｭｱ？ | 底部 | — | — | — | 橙 | にぶい橙 | — | 少 | — | 並 | — | ナデ | ヘラナデ+ナデ | — | | H-39 |
| -16 | 2H | フクド | 須恵器 | 坏 | 口縁部～底部 | — | — | — | 灰色 | 灰色 | — | 少 | — | 良 | — | ナデ | ナデ | — | | H-40 |
| -17 | 2H | フクド | 縄文土器 | 深鉢 | 口縁部～底部 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 隆帯、ＲＬ斜縄文、ＲＬ圧痕 | — | — | | S-22 |
| -18 | 2H | フクド | 縄文土器 | 深鉢 | 口縁部 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 隆帯、Ｌ・Ｒ圧痕 | — | — | | S-20 |
| -19 | 2H | フクド | 縄文土器 | 深鉢 | 胴部 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | ＬＲ・ＲＬ結束第一種羽状 | — | — | | S-21 |
| -20 | 2H 周溝 | フクド | 鉄製品 | 刀子 | — | 17.9 | 1.7 | 0.5 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | | M-3 |
| -21 | 2H カマド | 袖脇 | 銅製品 | 刀装具？ | — | 1.4 | 4.8 | 0.2 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 重さ2.5g、金箔付着 | M-1 |
| -22 | 2H カマド | 袖脇 | 銅製品 | 刀装具？ | — | 1.8 | 0.4 | 0.2 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 重さ0.4g | M-2 |
| -23 | 2H P-2 | 床 | 砥　石 | | — | 16.6 | 18.2 | 8.6 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 重さ3,370.0g、石英安山岩 | T-3 |
| 図9-1 | 3H | フク1 | 土師器 | 坏 | 底部 | — | — | 5.1 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | — | 微 | 多 | 並 | — | ナデ | ナデ | 糸切+ヘラナデ | | H-35 |
| -2 | 3H カマド | 袖 | 土師器 | 甕 | 口縁部～胴部 | (20.4) | — | — | 橙 | 橙 | — | 少 | — | 並 | 0.167 | ナデ、ヘラケズリ+ユビオサエ | ヘラナデ | — | | H-4 |
| -3 | 3H カマド | 袖脇 | 土師器 | 甕 | 口縁部～胴部 | — | — | — | 黄灰色 | 黄灰色 | 少 | 多 | — | 並 | — | 摩滅 | 摩滅 | — | 外面煤付着 | H-41 |
| -4 | 3H カマド | フク3 | 土師器 | 甕 | 口縁部～胴部 | (19.4) | — | — | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | — | 少 | — | 並 | 0.2 | ナデ | ナデ | — | P—4、外面煤付着 | H-3 |
| -5 | 3H カマド | フクド | 土師器 | 甕 | 口縁部～胴部 | — | — | — | 灰褐 | 橙 | — | 多 | 微 | 並 | — | 摩滅 | ナデ | — | | H-26 |
| -6 | 3H カマド | フク3 | 土師器 | 甕 | 口縁部～胴部 | (16.8) | — | — | 橙 | 浅黄橙 | 多 | 多 | — | 並 | — | 摩滅 | ヘラナデ | — | P—5　付着物有 | H-27 |
| -7 | 3H カマド | フク6 | 土師器 | 甕 | 口縁～底部 | 11.2 | 12.5 | 6.4 | 黄灰 | 灰色 | 微 | 少 | 微 | 並 | 0.333 | ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ | ヘラナデ | ヘラケズリ+砂底 | P—16 | H-2 |
| -8 | 3H | フクド | 土師器 | 甕 | 胴部 | — | — | — | 橙 | にぶい黄橙 | 少 | 多 | 多 | 並 | — | ヘラケズリ | ヘラナデ | — | | H-17 |
| -9 | 3H | フクド | 土師器 | ﾐﾆﾁｭｱ | 胴部～底部 | — | — | 5 | にぶい橙 | にぶい橙 | 少 | 多 | — | 並 | — | ヘラナデ | ヘラナデ | ナデ | | H-5 |
| -10 | 3H | フクド | 須恵器 | 坏 | 口縁部～胴部 | — | — | — | 灰黄褐 | 橙 | — | 少 | 少 | 並 | — | ナデ | ナデ | — | | H-33 |
| -11 | 3H カマド | フクド | 須恵器 | 甕 | 胴部 | — | — | — | 濃灰色 | 灰色 | — | 少 | — | 良 | — | 叩き目 | 当て具痕 | — | | S-13 |
| -12 | 3H カマド | フク2 | 須恵器 | 甕 | 胴部 | — | — | — | 濃青灰色 | 濃青灰色 | — | 微 | — | 良 | — | 叩き目 | ナデ | — | | S-9 |
| -13 | 3H | フクド | 須恵器 | 甕 | 胴部 | — | — | — | 濃灰色 | 灰色 | — | 微 | 少 | 良 | — | 叩き目 | 当て具痕 | — | | S-5 |
| -14 | 3H カマド | フク11 | 須恵器 | 甕 | 胴部 | — | — | — | 灰色 | 淡灰色 | — | 少 | — | 良 | — | 叩き目 | ヘラナデ | — | | S-10 |
| -15 | 3H | フク1 | 須恵器 | 甕 | 胴部 | — | — | — | 濃灰色 | 灰色 | 微 | 少 | 少 | 良 | — | 叩き目 | 当て具痕 | — | | S-7 |
| -16 | 3H | フクド | 縄文土器 | 深鉢 | 胴部 | — | — | — | | | — | — | — | — | — | ＬＲ斜縄文 | — | — | | S-19 |
| 図11-1 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～底部 | 11.8 | 5.3 | 4.9 | 明赤褐 | 明赤褐 | — | 少 | — | 良 | 0.02 | ロクロナデ | ロクロナデ | 糸切(回転) | P—120 | H-67 |
| -2 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～底部 | 12 | 6.4 | 5 | 明赤褐 | 明赤褐 | — | 少 | — | 良 | 0.16 | ロクロナデ | ロクロナデ | 糸切(回転) | P—8,67 | H-64 |
| -3 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～底部 | 12.6 | 5.7 | 4.8 | 明赤褐 | 明赤褐 | 微 | 少 | — | 良 | 0.58 | ロクロナデ | ロクロナデ | 糸切(回転) | P—24,51.114,161 | H-66 |
| -4 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～底部 | 13 | 5.6 | 5.2 | 明赤褐 | 明赤褐 | 微 | 少 | — | 良 | 0.333 | ロクロナデ | ロクロナデ | 糸切(回転) | P—22,45,55,61 | H-71 |
| -5 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～底部 | 13 | 6.2 | 4.8 | 明赤褐 | 明赤褐 | — | 少 | — | 良 | 0.375 | ロクロナデ | ロクロナデ | 糸切(回転) | P—44,49,84,116,130,131 | H-69 |
| -6 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～底部 | 13.4 | 5.5 | 4.8 | 明赤褐 | 明赤褐 | — | 少 | — | 良 | 0.75 | ロクロナデ | ロクロナデ | 糸切(回転) | P—10,28 | H-68 |
| -7 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 11.6 | — | — | 明赤褐 | 明赤褐 | — | 少 | — | 良 | 0.333 | ロクロナデ | ロクロナデ | — | | H-91 |
| -8 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 11.8 | — | — | 明赤褐 | 明赤褐 | — | 少 | — | 良 | 0.333 | ロクロナデ | ロクロナデ | — | P—120 | H-87 |
| -9 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～底部 | 11.4 | 5.8 | 5 | 明赤褐 | 明赤褐 | — | 少 | — | 良 | 0.25 | ロクロナデ | ロクロナデ | 糸切(回転) | P—75 | H-88 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| -10 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 12.4 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.667 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | P-32,144 | H-77 |
| -11 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 11.8 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.333 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | P-176 | H-49 |
| -12 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 11 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.29 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | | H-89 |
| -13 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 12.6 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.2 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | | H-56 |
| -14 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 13.8 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.143 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | P-124,155,179 | H-54 |
| -15 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 20.6 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.333 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | P-1,5,160 | H-76 |
| -16 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 20.6 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.333 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | P-105 | H-74 |
| 図12-17 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～底部 | 14.6 | 4.2 | 5.2 | 明赤褐 | 明赤褐 | 微 | 少 | － | 良 | 0.333 | ロクロナデ | ロクロナデ | 糸切(回転) | P-19 | H-72 |
| -18 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 11.6 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.167 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | P-119 | H-59 |
| -19 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 11.8 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.143 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | | H-58 |
| -20 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 12.6 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.333 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | | H-82 |
| -21 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 13 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 微 | － | 良 | 0.25 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | | H-52 |
| -22 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 13 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.25 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | | H-85 |
| -23 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～底部 | 12 | 3.9 | 5.6 | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.12 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | P-82 | H-61 |
| -24 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 13.8 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.25 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | P-52 | H-55 |
| -25 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 14.2 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | 微 | 少 | － | 良 | 0.5 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | | H-80 |
| -26 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～底部 | 13.6 | 3.6 | 5.4 | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.5 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | P-115,179 | H-83 |
| -27 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 15 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.167 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | | H-57 |
| -28 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 14.2 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.429 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | P-74 | H-81 |
| -29 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 15 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.143 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | | H-60 |
| -30 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 15.4 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.375 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | | H-92 |
| -31 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～底部 | 14.6 | 4.2 | 5.6 | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.25 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | P-2,83,180 | H-75 |
| -32 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 口縁部～胴部 | 15.4 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 中 | － | 良 | 0.2 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | P-109 | H-51 |
| -33 | 1竪 | フクド | 土師器 | 皿 | 口縁部～胴部 | 13.2 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.75 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | P-4,111 | H-97 |
| -34 | 1竪 | フクド | 土師器 | 皿 | 口縁部～胴部 | 13.4 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.4 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | P-85 | H-99 |
| -35 | 1竪 | フクド | 土師器 | 皿 | 口縁部～胴部 | 13.8 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.333 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | P-6,38 | H-50 |
| -36 | 1竪 | フクド | 土師器 | 皿 | 口縁部～胴部 | 14.2 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.25 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | | H-94 |
| -37 | 1竪 | フクド | 土師器 | 皿 | 口縁部～胴部 | 14.2 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.167 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | P-15 | H-86 |
| -38 | 1竪 | フクド | 土師器 | 皿 | 口縁部～胴部 | 15 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.6 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | P-153 | H-78 |
| -39 | 1竪 | フクド | 土師器 | 皿 | 口縁部～胴部 | 14 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | 微 | 少 | － | 良 | 0.25 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | P-171 | H-70 |
| -40 | 1竪 | フクド | 土師器 | 皿 | 口縁部～胴部 | 14 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 中 | － | 良 | 0.2 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | | H-53 |
| -41 | 1竪 | フクド | 土師器 | 皿 | 口縁部～胴部 | 13.4 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | 少 | 少 | － | 良 | 0.167 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | | H-93 |
| 図13-42 | 1竪 | フクド | 土師器 | 皿 | 口縁部～胴部 | 14.2 | － | － | 暗赤褐 | にぶい赤褐 | 少 | 少 | － | やや不良 | 0.167 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | | H-96 |
| -43 | 1竪 | フクド | 土師器 | 皿 | 口縁部～胴部 | 17.2 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.333 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | | H-84 |
| -44 | 1竪 | フクド | 土師器 | 皿 | 口縁部～胴部 | 17.4 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | 0.333 | ロクロナデ | ロクロナデ | － | | H-79 |
| -45 | 1竪 | フクド | 土師器 | 耳皿 | 口縁部～胴部 | 16 | － | － | 明赤褐 | 明赤褐 | 微 | 少 | － | 良 | － | ナデ+ユビオサエ | ロクロナデ | － | P-81,110 | H-63 |
| -46 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 底部 | － | － | 5.2 | 赤褐 | 赤褐 | － | 少 | － | 良 | － | ロクロナデ | ロクロナデ | 糸切(回転) | 赤色粒微量含 | S-28 |
| -47 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 底部 | － | － | 5.4 | 赤褐 | 赤褐 | 微 | 少 | － | 良 | － | ロクロナデ | ロクロナデ | 糸切(回転) | | S-31 |
| -48 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 底部 | － | － | 5.6 | 赤褐 | 赤褐 | － | 中 | － | 良 | － | ロクロナデ | ロクロナデ | 糸切(回転) | | S-29 |
| -49 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 底部 | － | － | 5.4 | 赤褐 | 赤褐 | － | 少 | － | 良 | － | ロクロナデ | ロクロナデ | 糸切(回転) | P-123 | S-27 |
| -50 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏 | 底部 | － | － | 5 | 赤褐 | 赤褐 | － | 少 | － | 良 | － | ロクロナデ | ロクロナデ | 糸切(回転) | P-162 | S-26 |
| -51 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏ＯＲⅢ | 底部 | － | － | 5.2 | 赤褐 | 赤褐 | － | 中 | － | 良 | － | ロクロナデ | 剥離 | 糸切(回転) | | S-25 |
| -52 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏ＯＲⅢ | 底部 | － | － | 5.4 | 赤褐 | 赤褐 | － | 中 | － | 良 | － | ロクロナデ | ロクロナデ | 糸切(回転) | | S-32 |
| -53 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏ＯＲⅢ | 底部 | － | － | 6 | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | － | ロクロナデ | ロクロナデ | 糸切(回転) | P-100 | S-30 |
| -54 | 1竪 | フクド | 土師器 | 坏ＯＲⅢ | 底部 | － | － | 4.6 | 明赤褐+灰赤 | 明赤褐 | 微 | 中 | － | 良+不良 | － | － | ロクロナデ | 糸切(回転) | P-165 | H-100 |
| -55 | 1竪 | フクド | 土師器 | 耳Ⅲ？ | 底部 | － | － | 4.8 | 明赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | － | ロクロナデ | ロクロナデ | 糸切(回転) | | H-65 |
| 図14-1 | 2土 | フク1 | 土師器 | 甕 | 口縁部 | － | － | － | 灰黄褐 | 灰黄褐 | － | 多 | － | 並 | － | ナデ、ヘラケズリ | ロクロナデ | － | | H-18 |
| -2 | 2土 | フク1 | 土師器 | 甕 | 胴部 | － | － | － | 黒褐 | にぶい赤褐 | － | 少 | 微 | 並 | － | ヘラケズリ | ロクロナデ | － | | H-19 |
| 図16-1 | P－27 | フク1 | 縄文土器 | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | － | － | | | | 並 | － | ＬＲ・ＲＬ結束第一種羽状 | － | － | | S-17 |
| -2 | P－27 | フク1 | 羽　口 | | － | － | － | － | にぶい橙 | にぶい橙 | 微 | 少 | － | 並 | － | ハケメ | 剥離 | － | 赤色粒少量含 | H-47 |
| 図19-1 | MX・MY-490 | Ⅰ | 土師器 | 坏 | 底部 | － | － | 5.6 | 赤褐 | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | － | ロクロナデ | ロクロナデ | 糸切(回転) | | S-15 |
| -2 | MX・MW-488 | Ⅰ | 土師器 | 坏 | 底部 | － | － | 6.4 | － | 明赤褐 | － | 少 | － | 良 | － | － | ロクロナデ | 糸切(回転) | | S-14 |
| -3 | MX・MY-490 | Ⅰ | 土師器 | 甕 | 胴部 | － | － | － | にぶい褐 | 褐灰 | 少 | 多 | － | 良 | － | ヘラケズリ | ロクロナデ | － | 赤色粒微量含 | H-10 |
| -4 | MX・MY-490 | Ⅰ | 土師器 | 甕 | 胴部 | － | － | － | 黒褐 | 橙 | － | 多 | － | 並 | － | ヘラナデ | ロクロナデ | － | | H-8 |
| -5 | | 表採 | 土師器 | 甕 | 胴部～底部 | － | － | － | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 微 | 多 | － | 並 | － | ヘラケズリ | ヘラナデ | － | | H-37 |
| -6 | MX・MY-490 | Ⅰ | 土師器 | 甕 | 底部 | － | － | 6.5 | にぶい褐 | 橙 | 微 | 多 | － | 並 | － | ヘラナデ | ナデ | ヘラケズリ | 赤色粒微量含 | H-7 |
| -7 | MX・MY-490 | Ⅰ | 土師器 | 甕 | 底部 | － | － | 7.2 | 灰黄褐 | 灰黄褐 | － | 多 | － | 並 | － | 不明 | ナデ？ | 砂底 | | H-6 |
| -8 | MW・MX-488 | Ⅰ | 須恵器 | 甕 | 胴部 | － | － | － | 濃灰色 | 灰色 | － | 少 | － | 良 | － | 叩き目 | ナデ | － | | S-12 |
| -9 | MW・MX-488 | Ⅰ | 須恵器 | 甕 | 胴部 | － | － | － | 濃灰色 | 濃灰色 | － | 少 | 少 | 良 | － | 叩き目 | 当て具痕 | － | | S-6 |
| -10 | | 表採 | 須恵器 | 甕 | 胴部 | － | － | － | 濃青灰色 | 濃灰色 | － | 少 | 微 | 良 | － | 叩き目 | 当て具痕 | － | | S-11 |
| -11 | MY-491 | Ⅰ | 須恵器 | 甕 | 胴部 | － | － | － | 濃灰色 | 濃青灰色 | － | 少 | 微 | 良 | － | 叩き目 | ナデ | － | | S-4 |
| -12 | MY-491 | Ⅰ | 須恵器 | 甕 | 胴部 | － | － | － | 濃灰色 | 濃灰色 | － | 中 | 微 | 良 | － | 叩き目 | ナデ | － | | S-8 |
| -13 | MW-488 | Ⅰ | 縄文土器 | 深鉢 | 胴部 | － | － | － | | | － | － | － | － | － | ＲＬ斜縄文 | － | － | | S-18 |
| -14 | MX-490 | Ⅰ | 剥片石器 | | － | 4.1 | 4.5 | 1.3 | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | 重さ24.0ｇ、硅質頁岩 | M-4 |
| -15 | MW-485 | Ⅰ | 鉄　滓 | | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | | T-1 |

# ま　と　め

今年度、当委員会で発掘調査を実施した野木遺跡は、青森市大字野木字山口ほかに所在する遺跡である。立地環境は、八甲田山から延びる火山性台地上の標高88m～90mに位置する。

本調査は、市道野木酸ケ湯線特殊改良一種事業に伴い実施したもので、調査面積は363㎡である。検出した遺構は、平安時代の竪穴住居跡4軒、竪穴遺構1基、土坑2基、小ピット41基、溝跡4条である。出土した遺物は、平安時代（9C末～10C前半）の遺物を主体とし、土師器、須恵器、鉄製品、銅製品、縄文時代の土器・石器等である。

このうち、第1号竪穴遺構からは、10世紀前半の土師器焼成を示す生焼けの土器、破裂した際のチップ状の破片、生焼けの土器と焼成良好品接合資料などが出土しており、該期の土器生産における一資料を加えることができた。

また、本遺跡は、県埋蔵文化財調査センターが、平成7年度に中核工業団地整備事業に先立つ試掘調査を、翌平成8年度から同事業に係る発掘調査を実施してきており、今年度から当委員会も加わり、合同で発掘調査を実施している。北側幹線道路部分を当委員会が、その南側の遺構密集地区を県埋蔵文化財調査センターが担当しており、本調査区は、県埋蔵文化財調査センターが調査を実施している遺構密集地区よりさらに南側の部分にあたる。

今年度までの調査の結果、本遺跡は、平安時代の大規模な集落跡であることが確認されており、本調査区は、県埋蔵文化財調査センターが調査を実施している地区から延びる集落の一部であると想定される。また、本調査区の南東側の畑地から、土師器等の遺物が表面採集できることから、遺跡の範囲は、さらに南側に展開していくものと推定される。

なお、中核工業団地整備事業に係る発掘調査は総調査面積130,000㎡にのぼり、来年度も引き続き実施される予定であり、青森市内においては、平安時代の遺跡がこれほど大規模に調査された例はなく、本市における歴史時代が姿を現しつつあることが予想され、今後の調査に期待したい。

最後ではあるが、調査実施から本報告書刊行に至るまで、ご指導、ご協力を賜った多くの方々に改めて感謝の意を添え、まとめとさせていただきたい。

（担当者一同）

**引用参考文献**


青森県教育委員会　1980『金木町神明町遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第58集

〃　1995『山本(2)遺跡』　〃　第171集

〃　1995『野尻(2)遺跡』　〃　第172集

〃　1996『野尻(2)遺跡Ⅱ・野尻(3)遺跡・野尻(4)遺跡』　〃　第186集

〃　1997『朝日山(3)遺跡』　〃　第215集

青森市蛍沢遺跡発掘調査団　1979　『蛍沢遺跡』

青森市教育委員会　1995『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』

〃　1997『桜峯(1)遺跡発掘調査概報Ⅱ』

〃　1997『新町野遺跡試掘調査報告書』

〃　1997『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』

秋山浩三　1994　「キズモノの土器－古代土師器の黒斑への視点と流通－」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』2

秋山浩三　1997　「黒斑等の遺物属性からみた土師器焼成遺構」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会

井上雅孝　1995　「海綿骨針を含む続縄文土器について」『みちのく発掘－菅原文也先生還暦記念論集－』

小川貴司　1979　「回転糸切技法の展開」『考古学研究』26－1

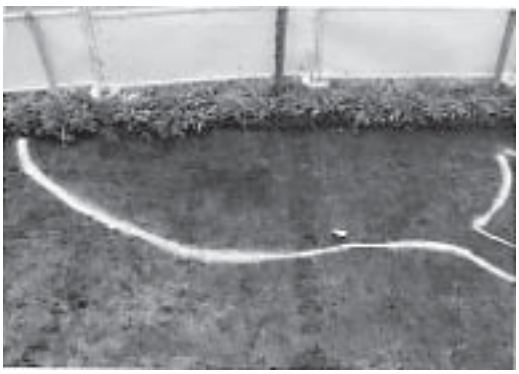
徳澤啓一　1997　「土師器焼成遺構の研究の現状と展望」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会

木立雅朗　1997　「土師器焼成坑を定義するために」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会

望月精司　1997　「土師器焼成坑の分類」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会

工藤清泰　1998　「津軽平野の様相」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料』

# 写　真　図　版



第１号竪穴住居跡　確認状況(E→)

第１号竪穴住居跡　土層堆積状況(E→)

第１号竪穴住居跡　完掘状況(E→)

第１号竪穴住居跡　外ピット１土層堆積状況(W→)

第２号～第４号竪穴住居跡　確認状況(S→)

第２号竪穴住居跡　土層堆積状況(N→)

第２号(中央)・第３号(左)・第４号(右)竪穴住居跡
土層堆積状況(S→)

第２号竪穴住居跡　完掘状況(S→)

写真図版１

第 2 号竪穴住居跡　カマド土層堆積状況(N →)

第 2 号竪穴住居跡　カマド上面遺物出土状況(W →)

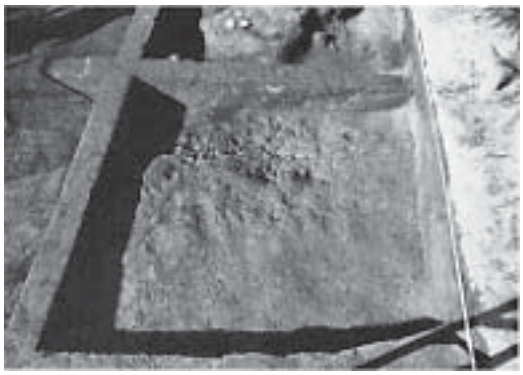
第 2 号竪穴住居跡　カマド完掘状況(W →)

第 3 号竪穴住居跡　確認状況(E →)

第 3 号竪穴住居跡　完掘状況(SE →)

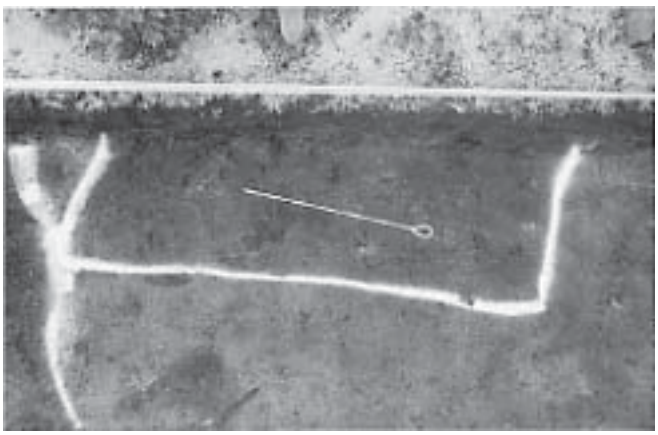
第 3 号竪穴住居跡　カマド土層堆積状況(E →)

第 3 号竪穴住居跡　カマド完掘状況(N →)



第 4 号竪穴住居跡　土層堆積状況(S →)

**写真図版 2**



第１号竪穴遺構　確認状況(W→)

第１号竪穴遺構　土層堆積状況(W→)

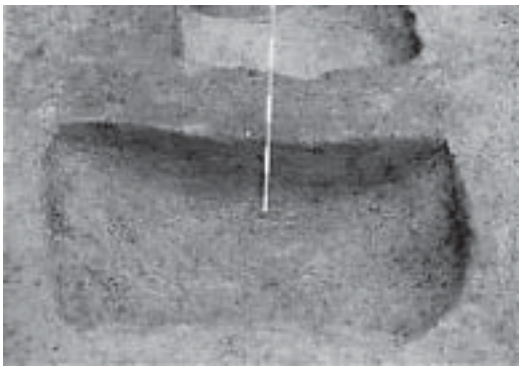
第１号竪穴遺構　遺物出土状況(W→)

第１号竪穴遺構　完掘状況(N→)

**写真図版３**

第 1 号土坑土層堆積状況(E →)

第 1 号土坑完掘状況(NE →)



第 2 号土坑土層堆積状況(S →)

第 2 号土坑完掘状況(E →)

第 1 号・第 2 号溝跡確認状況(S →)

第 3 号(右)・第 4 号(左)溝跡完掘状況(E →)

作業風景

写真図版 4

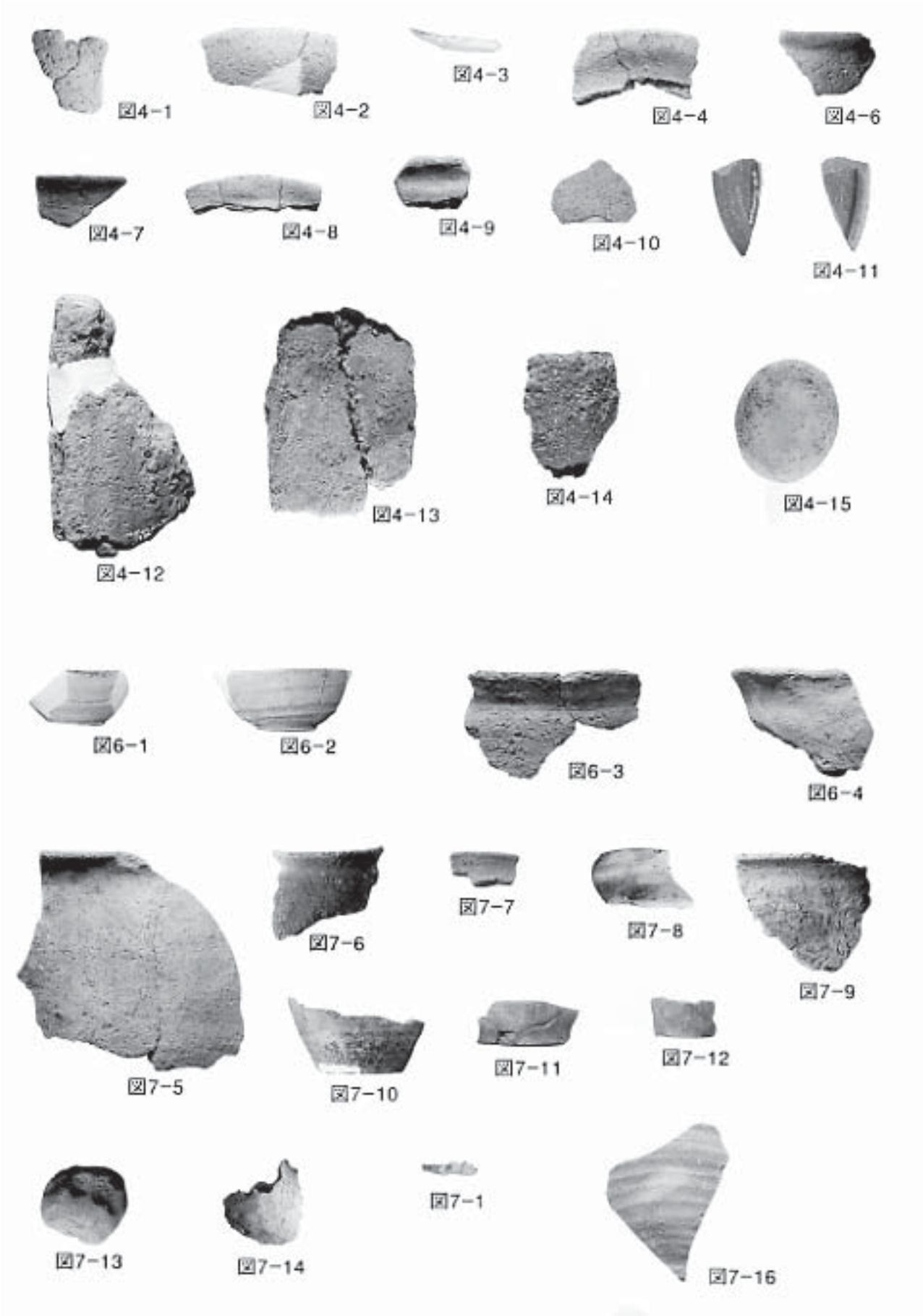


図4-1
図4-2
図4-3
図4-4
図4-6
図4-7
図4-8
図4-9
図4-10
図4-11
図4-12
図4-13
図4-14
図4-15
図6-1
図6-2
図6-3
図6-4
図7-5
図7-6
図7-7
図7-8
図7-9
図7-10
図7-11
図7-12
図7-13
図7-14
図7-1
図7-16

**写真図版 5**

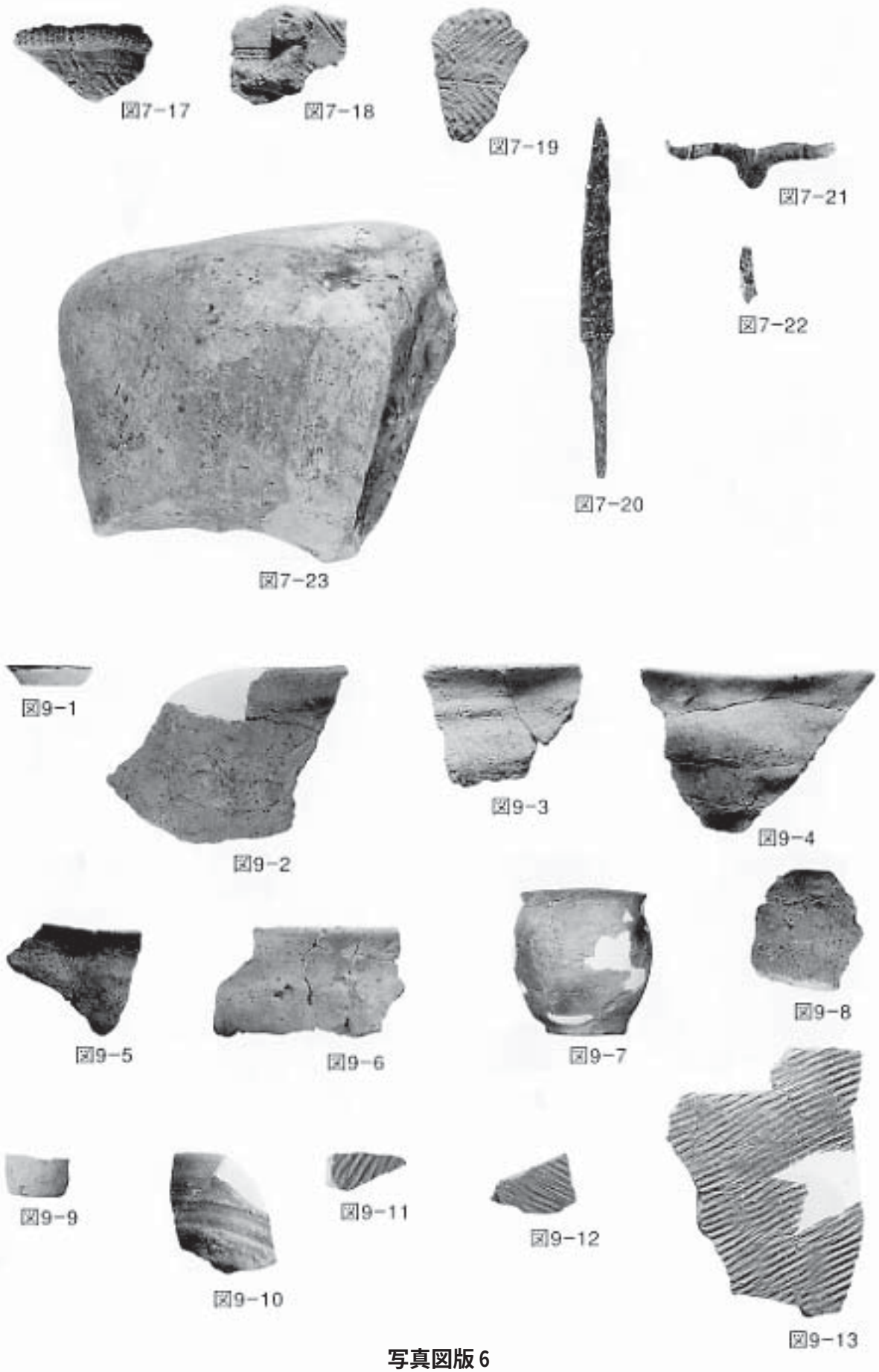


図7-17
図7-18
図7-19
図7-21
図7-22
図7-20
図7-23
図9-1
図9-2
図9-3
図9-4
図9-5
図9-6
図9-7
図9-8
図9-9
図9-10
図9-11
図9-12
図9-13

**写真図版 6**

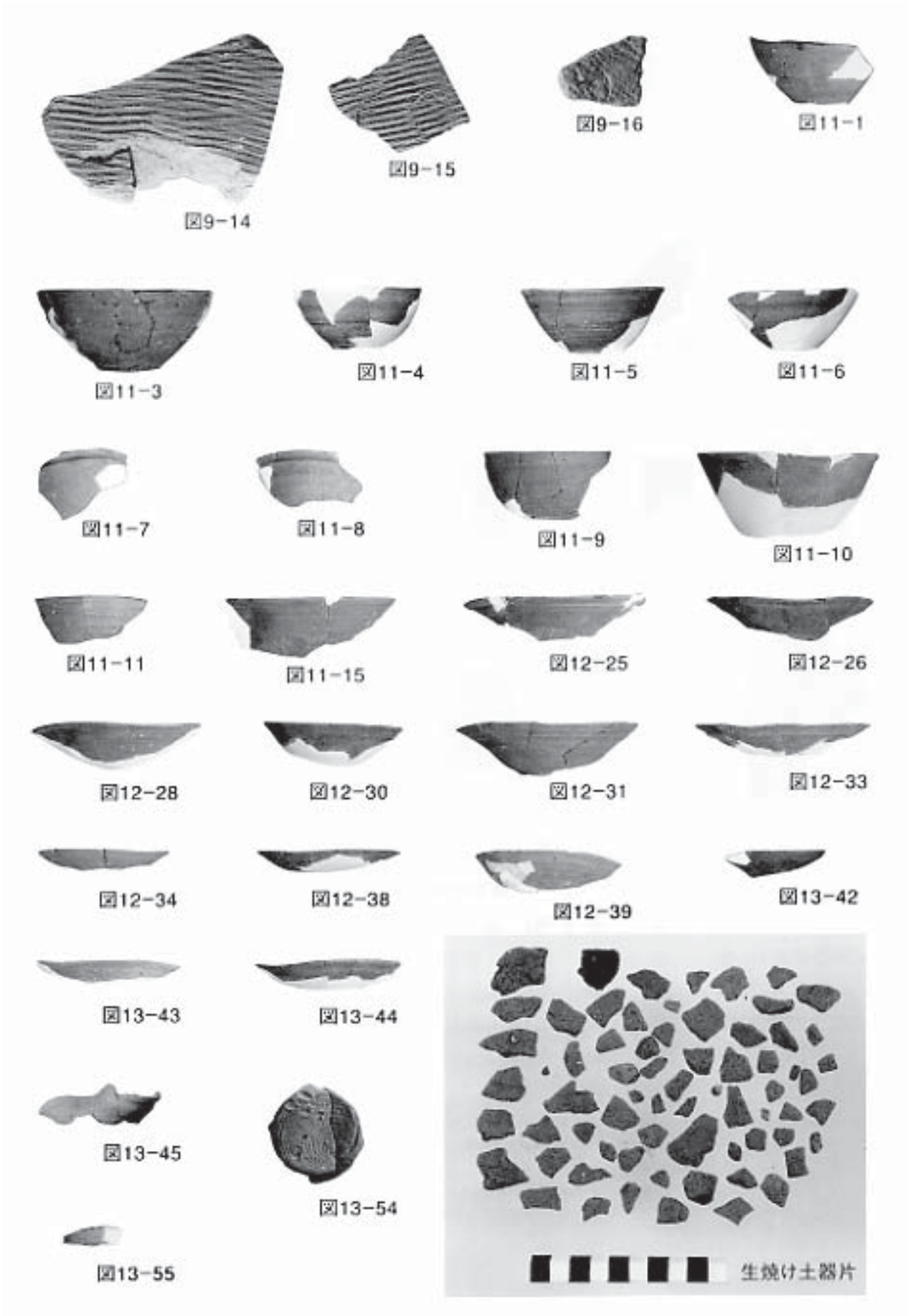


図9-14
図9-15
図9-16
図11-1
図11-3
図11-4
図11-5
図11-6
図11-7
図11-8
図11-9
図11-10
図11-11
図11-15
図12-25
図12-26
図12-28
図12-30
図12-31
図12-33
図12-34
図12-38
図12-39
図13-42
図13-43
図13-44
図13-45
図13-54
図13-55
生焼け土器片

**写真図版 7**

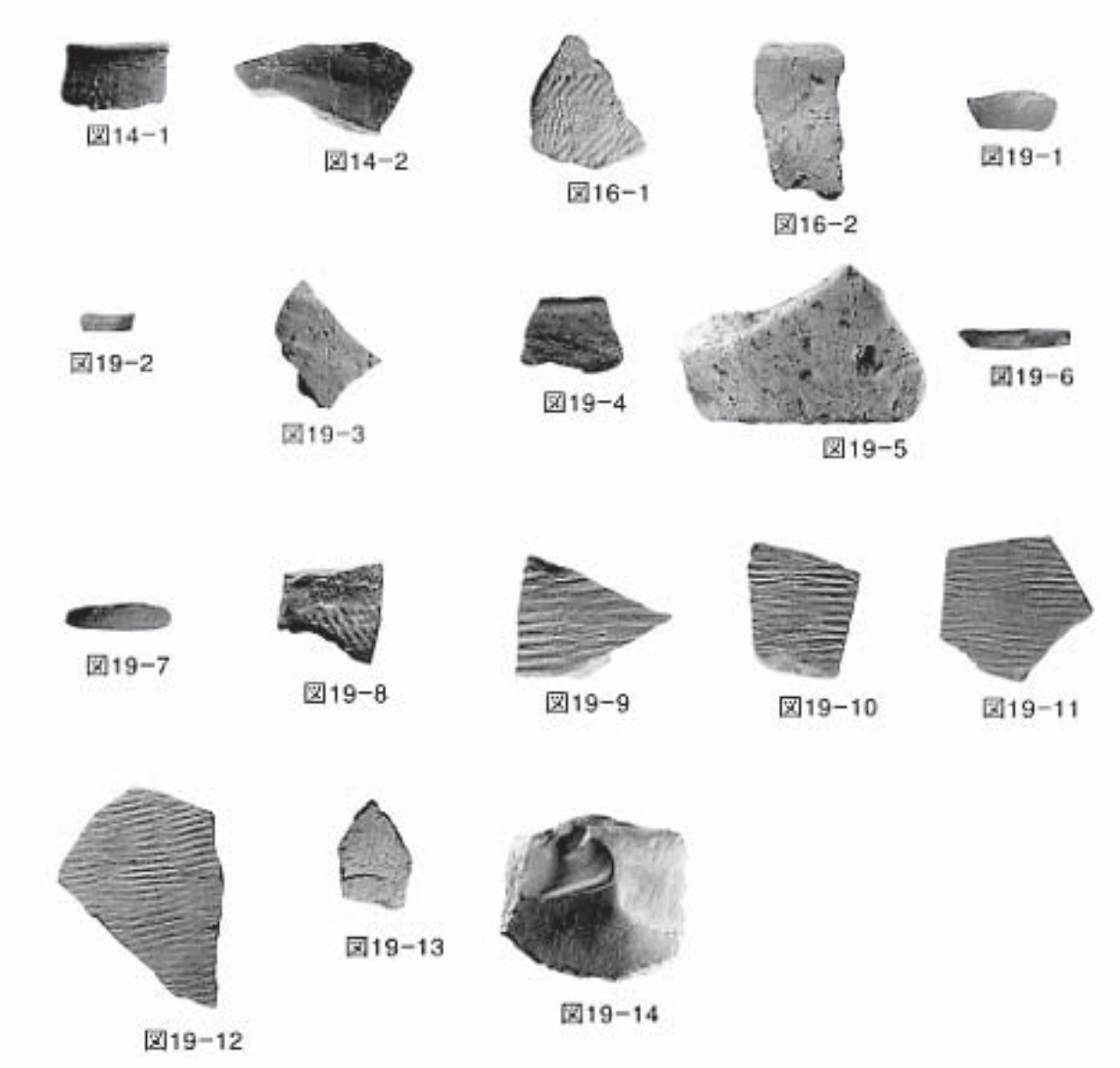


図14−1
図14−2
図16−1
図16−2
図19−1
図19−2
図19−3
図19−4
図19−5
図19−6
図19−7
図19−8
図19−9
図19−10
図19−11
図19−12
図19−13
図19−14

写真図版 8

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふりがな | のぎいせきはっくつちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 野木遺跡発掘調査報告書 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 青森市埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第38集 |
| 編著者名 | 木村淳一、田澤淳逸、沼宮内陽一郎、設楽政健 |
| 編集機関 | 青森市教育委員会 |
| 所在地 | 〒030-8555　青森県青森市中央一丁目22－5　ＴＥＬ0177－34－1111 |
| 発行年月日 | 西暦1998年3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| のぎ<br>野木 | あおもりけんあおもりし<br>青森県青森市<br>のぎあざやまぐち<br>野木字山口 | 02201 | 210 | 40°<br>44′<br>58″ | 140°<br>44′<br>22″ | 19970924<br>～<br>19971031 | 363 | 道路建設（市道野木酸ヶ湯線特殊改良一種改良事業）に伴う事前調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 野木 | 集落跡 | 平安 | 竪穴住居跡<br>竪穴遺構<br>土坑<br>小ピット<br>溝跡 | 4軒<br>1基<br>2基<br>41基<br>4条 | 土師器<br>須恵器<br>鉄製品<br>土製品<br>銅製品 | 土師器焼成に関わる遺物等が出土 |

## 既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

| | | | |
|---|---|---|---|
| 青森市の文化財 | 1 | 1962 | 『三内霊園遺跡調査概報』 |
| 〃 | 2 | 1965 | 『四ツ石遺跡調査概報』 |
| 〃 | 3 | 1967 | 『玉清水遺跡調査概報』 |
| 〃 | 4 | 1970 | 『三内丸山遺跡調査概報』 |
| 〃 | 5 | 1971 | 『野木和遺跡調査報告書』 |
| 〃 | 6 | 1971 | 『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 7 | 1971 | 『大浦遺跡調査報告書』 |
| 〃 | 8 | 1973 | 『孫内遺跡発掘調査報告書』 |
| | | 1979 | 『蛍沢遺跡』 |
| | | 1983 | 『四戸橋遺跡調査報告書』 |
| 青森市の埋蔵文化財 | | 1983 | 『山野峠遺跡』 |
| 〃 | | 1985 | 『長森遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | | 1986 | 『田茂木野遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | | 1987 | 『横内城跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | | 1988 | 『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 |
| 青森市埋蔵文化財調査報告書 | 第16集 | 1991 | 『山吹（1）遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第17集 | 1992 | 『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』 |
| 〃 | 第18集 | 1993 | 『三内丸山（2）遺跡発掘調査概報』 |
| 〃 | 第19集 | 1993 | 『市内遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第20集 | 1993 | 『小牧野遺跡発掘調査概報』 |
| 〃 | 第21集 | 1994 | 『市内遺跡詳細分布調査報告書』 |
| 〃 | 第22集 | 1994 | 『小三内遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第23集 | 1994 | 『三内丸山（2）・小三内遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第24集 | 1995 | 『横内遺跡・横内（2）遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第25集 | 1995 | 『市内遺跡詳細分布調査報告書』 |
| 〃 | 第26集 | 1995 | 『桜峯（2）遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第27集 | 1996 | 『桜峯（1）遺跡発掘調査概報』 |
| 〃 | 第28集 | 1996 | 『三内丸山（2）遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第29集 | 1996 | 『市内遺跡詳細分布調査報告書』 |
| 〃 | 第30集 | 1996 | 『小牧野遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第31集 | 1997 | 『市内遺跡詳細分布調査報告書』 |
| 〃 | 第32集 | 1997 | 『桜峯（1）遺跡発掘調査概報Ⅱ』 |
| 〃 | 第33集 | 1997 | 『新町野遺跡試掘調査報告書』 |
| 〃 | 第34集 | 1997 | 『葛野（2）遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第35集 | 1997 | 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 |
| 〃 | 第36集 | 1998 | 『桜峯（1）遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第37集 | 1998 | 『新町野遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第38集 | 1998 | 『野木遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 第39集 | 1998 | 『市内遺跡詳細分布調査報告書』 |
| 〃 | 第40集 | 1998 | 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 |
| 〃 | 第41集 | 1998 | 『野木遺跡発掘調査概報』 |
| 〃 | 第42集 | 1998 | 『熊沢遺跡発掘調査概報』 |


青森市埋蔵文化財調査報告書第38集

**野木遺跡発掘調査報告書**

発行年月日　平成10年3月31日

発　　行　青森市教育委員会

〒030－8555　青森市中央一丁目22－5

TEL　0177－34－1111

印　　刷　第一印刷株式会社

〒038－0003　青森市石江字江渡3－1

TEL　0177－82－2333